

國學院大學學術情報リポジトリ

東京都三宅村三宅島積石信仰関連遺跡分布調査報告： 國學院大學伝統文化リサーチセンター考古学調査報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002002

東京都三宅村
三宅島積石信仰関連遺跡
分布調査報告

2010

國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト

例 言

1. 本書は、平成21(2009)年度に國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト（責任担当者：杉山林継）が実施した、三宅島積石信仰関連遺跡分布調査の報告書である。
2. 本調査は、東京都三宅村三宅島における積石遺構と和鏡出土・伝世地の悉皆踏査、並びに積石信仰に関連する自然・人文環境データの収集を目的として、平成21(2009)年8月26日から同月30日まで実施した。
3. 本調査は、吉田恵二（当センター教授）が担当し、内川隆志（当センター准教授）、深澤太郎（当センター助教）、石井匠（当センターポスドク研究員）、佐藤周平（本学大学院文学研究科）、上田翼（本学文学部史学科）が参加した。整理作業には、朝倉一貴・楠恵美子（本学大学院文学研究科）、山口晃（本学文学部史学科）が加わり、有志として林友里恵・吉田千夏（本学文学部史学科）がこれを補佐した。
4. 本書の執筆者については、それぞれ担当箇所の末尾に文責を示した。なお、第2章・第4章の執筆に関しては、蔵野泰洋・剣持怜子・斎藤唯・中島金太郎・中橋辰也（本学文学部史学科）による協力があった。
5. 図表の作製は、内川隆志・深澤太郎・楠恵美子・山口晃が担当し、GPS測位データの整理とデジタルマッピングは、朝倉一貴・山口晃が行った。また、写真図版の作製は、佐藤周平・山口晃が担当した。
6. 本調査に当たっては、三宅村役場、三宅村教育委員会、櫻田昭正氏（三宅村教育委員会教育長）、野田憲幸氏（三宅村教育委員会教育課教育係長）、浅沼基氏（三宅村商工会会長）、浅沼元紀氏（三宅村役場総務課税務係）、加藤信義氏・加藤綾子氏（中郷遺跡積石遺構群西群3号積石遺構）、筑波栄一郎氏（大長井積石遺構群）、津村晋氏（神着郷土芸能保存会副会長）、土屋輝美氏（土屋家屋敷神）、藤本鶴子氏（「腰元の塚」積石遺構）、壬生明彦氏（御笏神社ほか）、壬生香氏・壬生伊津子氏（神着観音堂）をはじめとする三宅島の皆様より、多大な御厚意を賜った（順不同）。ここに記して、深甚なる謝意を表すると共に、記載漏れの方々には御海容を乞う次第である。
7. 整理作業に際しては、東京都教育委員会、首都大学東京図書情報センター、明治大学博物館、本学研究開発推進機構事務課、岡崎完樹氏（東京都教育庁地域教育支援部管理課埋蔵文化財係長）、熊谷礼位子氏（首都大学東京図書情報センター本館閲覧サービス担当）、中村大氏（独立行政法人総合地球環境学研究所プロジェクト研究員・当センター共同研究員）、手塚美穂氏（杉並区教育委員会嘱託）、加藤里美氏（当センター講師）、伊藤慎二氏（本学助教）、中村耕作氏（当センター助手）、稲田美里氏（本学考古学研究室嘱託）、阿部昭典氏（当センター客員研究員）、加藤元康氏（当センターポスドク研究員）、田中大輔氏（当センター共同研究員）、浪形早季子氏・宮川博司氏・新原佑典氏（当センターリサーチアシスタント）、塩谷風季氏・有福小百合氏・中島大輔氏・成瀬和也氏・江戸邦之氏・田島太良氏・平野哲也氏（本学大学院文学研究科）の御協力を得た（順不同）。ここに記して、篤い御厚意に感謝申し上げたい。
8. 本書は、吉田恵二・内川隆志監修の下、深澤太郎・石井匠が編集した。

目 次

第1章 調査に至る経緯	(吉田恵二・内川隆志・深澤太郎)	183
第2章 地理的・歴史的環境	(朝倉一貴・佐藤周平・楠恵美子・山口晃)	184
第3章 調査経過	(佐藤周平・上田翼)	186
第4章 調査成果	(内川隆志・深澤太郎・石井匠)	187
第1節 伊豆地区	(深澤太郎・林友里恵・吉田千夏)	188
第2節 神着地区	(深澤太郎・林友里恵・吉田千夏)	192
第3節 坪田地区	(深澤太郎・林友里恵・吉田千夏)	193
第4節 阿古地区	(深澤太郎・林友里恵・吉田千夏)	197
第5節 伊ヶ谷地区	(深澤太郎・林友里恵・吉田千夏)	198
第5章 総括	(深澤太郎・石井匠)	199
資料編 三宅島の和鏡	(内川隆志)	211

挿図目次

第1図 三宅島の噴火年代と主要関連遺跡・社寺	185
第2図 伊ヶ谷・伊豆・神着地区	187
第3図 伊豆地区No.9 (拡大)	188
第4図 伊豆地区No.27・No.28・No.48 (拡大)、No.48見取り図	189
第5図 伊豆地区No.3・No.22～No.25・No.45・No.52 (拡大)	191
第6図 落人姫伝説関係の塚	191
第7図 神着地区No.44・No.51・No.64 (拡大)	192
第8図 神着地区 (北部)	193
第9図 神着地区 (東部)	193
第10図 坪田地区	194
第11図 坪田地区No.12・No.34～No.38・No.54・No.56・No.58・No.59 (拡大)	195
第12図 阿古地区	198

表目次

第1表 三宅島の積石遺構と和鏡出土・伝世地 (1)	202
第2表 三宅島の積石遺構と和鏡出土・伝世地 (2)	204
第3表 三宅島の積石遺構と和鏡出土・伝世地 (3)	206

図版目次

図版1 物見処遺跡、神沢神社・宝山遺跡、薬師堂境内積石遺構、尾いづみ積石遺構、伊豆七人山積石遺構	208
図版2 「落人姫」積石遺構、「腰元の塚」積石遺構群、「カムロの塚」積石遺構群、姉川神社、春家積石遺構群	209
図版3 大長井積石遺構群、中郷遺跡東群、中郷遺跡西群、坪田七人山積石遺構群、魔王神社旧社地、大般若供養塔・道の沢経塚、西之御門積石遺構	210

第1章 調査に至る経緯

伊豆半島沖、相模灘の南に連なる伊豆諸島には、島々独自の文化や日本列島各地で失われつつある旧習俗が保存されている。本書で取り扱おうとする三宅島の積石信仰も、維新前後の神仏分離や、明治初年に行われた神社合祀の影響は免れ得なかったであろうが、少なくとも中世まで遡る民俗宗教の面影を今日に伝える貴重な文化遺産であることは疑いない。このような積石塚の実態を明らかにするためには、その構造や存続時期を把握するための考古学的調査は勿論、現在も受け継がれている信仰習俗を理解するための人類学的研究を試みる必要がある(桜井1958)。ところが、戦後間もなくから伊豆諸島においても、十分な調査や記録が行われないままに民俗風習が変質していくことや、開発などによる各種文化財の湮滅、島外流出が危惧されるようになり、早急な記録や保護が求められるに至った。

そこで東京都教育委員会は、特に調査の立ち遅れが指摘されていた三宅島・御蔵島をフィールドに、民俗・考古・古文書・天然記念物などの諸分野を対象とする調査計画を策定し、昭和31(1956)年7月20日から8月7日の日程で、後藤守一氏を調査団長とする「三宅御蔵文化財総合調査」を実施した(三宅御蔵文化財総合調査団編1958・1965)。三宅島における積石塚の考古学的研究は、この調査の一環として行われた坪田中郷積石塚群の発掘を嚆矢とする(後藤・梅沢1958)。もっとも、中郷積石塚群の調査は当初から計画されていた事業ではなく、三宅村坪田に和鏡の出土を伴う積石塚が多数存在するとの情報が、元三宅村立坪田中学校長の桜井朝治氏より寄せられたことを契機として急遽実施されたものであった。同調査では、加えて坪田の大長井や、御蔵島村立御蔵島小中学校附近でも積石・集石群が見つかり、坪田松村家屋敷神・田中家屋敷神や、御蔵島村栗本家屋敷神の積石塚に祀られた和鏡が確認されるなど、三宅島・御蔵島の積石塚や和鏡が、古くから伝わる信仰習俗と密接に関わる存在であることも明らかになったのである。その後、三宅島では東京都立三宅高等学校教諭であった橋口尚武氏をはじめとする伊豆諸島考古学研究会が、島の遺跡に関する悉皆的な記録を行い、積石塚や和鏡についても整理を試みた(橋口編1975)。積石塚については、発掘調査が行なわれている事例と、未調査の事例を同一の土俵で論じざるを得なかった所に若干の問題が指摘されるものの、多くが手付かずのままにある積石塚を対象として、一定地域内における網羅的な俯瞰が可能となった成果は大きい。

このような中で、本学考古学研究室は、昭和56(1981)年に都立三宅高等学校の田中俊造事務長(当時)より三宅島における積石塚についての学術調査要請を受けた。そこで本学では、同島に所在する積石塚の調査・研究を継続的に進めることとし、それらの年代・構造・性格の追求を目的とする発掘調査を、考古学実習の一環として執り行うことに決したのである。昭和56年には坪田地区中郷の積石塚群(吉田編1993)、昭和57(1982)年から平成20(2008)年にかけては伊豆地区に所在する大型積石塚群である物見処遺跡の調査を実施し、同時に島内の積石遺構について悉皆的な分布調査を行った(吉田編1994~2000)。また、平成4(1992)年には本学海洋信仰研究会が、三宅島をはじめとする伊豆諸島の和鏡を悉皆調査した(國學院大學海洋信仰研究会編1993)。しかしながら、多くの積石には遺構に伴う遺物が少なく、個別遺構の最盛期や、積石信仰の全体像を描いていくためには、考古学的情報を基盤としつつも、関連する自然・人文環境の把握が欠かせぬ要件になってくるだろう。

一方、当センターでは、平成19(2007)年度文部科学省オープンリサーチセンター整備事業に選定された「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」事業の一環として、「祭祀遺跡に見るモノと心」グループが既往の調査成果を活用しながら、「神道」の成立・展開や、日本列島の信仰史に関する考古学的研究を推進している。そこで平成21(2009)年度は、本学が長く調査に携わってきた三宅島の積石塚を調査研究対象の一つに定め、積石塚・和鏡出土伝世地の位置情報、積石の構築材となる海岸転石の散布状況、そして在地信仰の基盤となった社寺などの実態調査を実施した。本書では、主に積石塚と和鏡出土・伝世地の分布調査成果について報告するが、当調査で得られた基礎的な情報は、従来の調査成果と併せて今後の積石研究に生かされることになる。(吉田・内川・深澤)

第2章 地理的・歴史的環境

三宅島の概要

伊豆諸島の一つに数えられる三宅島は、東京から約180km南南西の沖合に位置する火山島で、雄山を中心とする外周は約35kmである。度重なる噴火災害を被りつつも、古く縄文時代から今日まで、時々の島人たちが三宅島での生活を守り続けてきた。古代以降は伊豆国に属し、鎌倉時代には執権北条氏の支配下に入った。室町時代になると関東管領上杉氏や堀越公方足利氏の膝下に置かれ、15世紀末には北条早雲が堀越公方の足利茶々丸を滅ぼして伊豆を領することとなる。また、江戸時代には天領とされ、寛文10(1670)年からは伊豆代官所の管下に位置付けられた。かつては、島内も北から時計回りに神着村・坪田村・阿古村・伊ヶ谷村・伊豆村の五ヶ村で構成されていたが、昭和21(1946)年に三宅村が成立して一島一村体制となった。

島の南側には黒潮の流れが横たわっているため、比較的温暖な気候と多様な植生に恵まれており、豊かな海産物にも事欠かない。しかし、降雨時に水の流れる沢筋があるだけで本格的な川は存在せず、火山性の土壌や傾斜面の多さから農耕には不向きな土地柄とされる(任1990)。現在は、弥生時代の噴火によって形成された火口湖である大路池が全島の水源としての役割を果たしているものの、以前は天水や溜池、あるいは僅かな湧水に頼る生活が一般的であった。近世には、粟・大麦・稗などの栽培が行われていたが、このような自然条件下にあったため、多雨地帯であるにも拘らず雨乞いが盛んであったという(池田1983)。

石の信仰と習俗

三宅島の雨乞いでは、それ以外の神信心と同様に「垢離取り」が欠かせない。「垢離取り」とは、海岸に散布する円礫を潮で洗って村々の社へ供える風習であり、同じような行為は、船出を見送った後にも行われた。また、伊豆大久保浜の盆行事では、無縁仏を迎えるために海岸で円礫を採集して集石を営む(三宅島史編纂委員会編1982)。三宅島の神社には石神も多く、阿古富賀神社の火山弾、神着咲玉姫社の溶岩や(廣瀬1987)、神着「かみの宮」の円礫、神着「山の神」・「片菅様」・椎取神社、そして阿古富賀神社の板状節理片など(森谷1974・1975)、様々な種類の岩石が祀られている。なお、伊豆の若者組が別当原の賽之神で正月15日に行っていた「お毬とり」は(池田1983)、所謂つぶて投げの行事であり(中沢1981)、少なくとも中世まで遡る風習が大正末年まで残されていた。我々が調査研究対象としている積石塚や、それに伴う和鏡の信仰も、かかる在来の石信仰・石習俗と通底する所があるのだろう。

『三宅記』と島の宗教

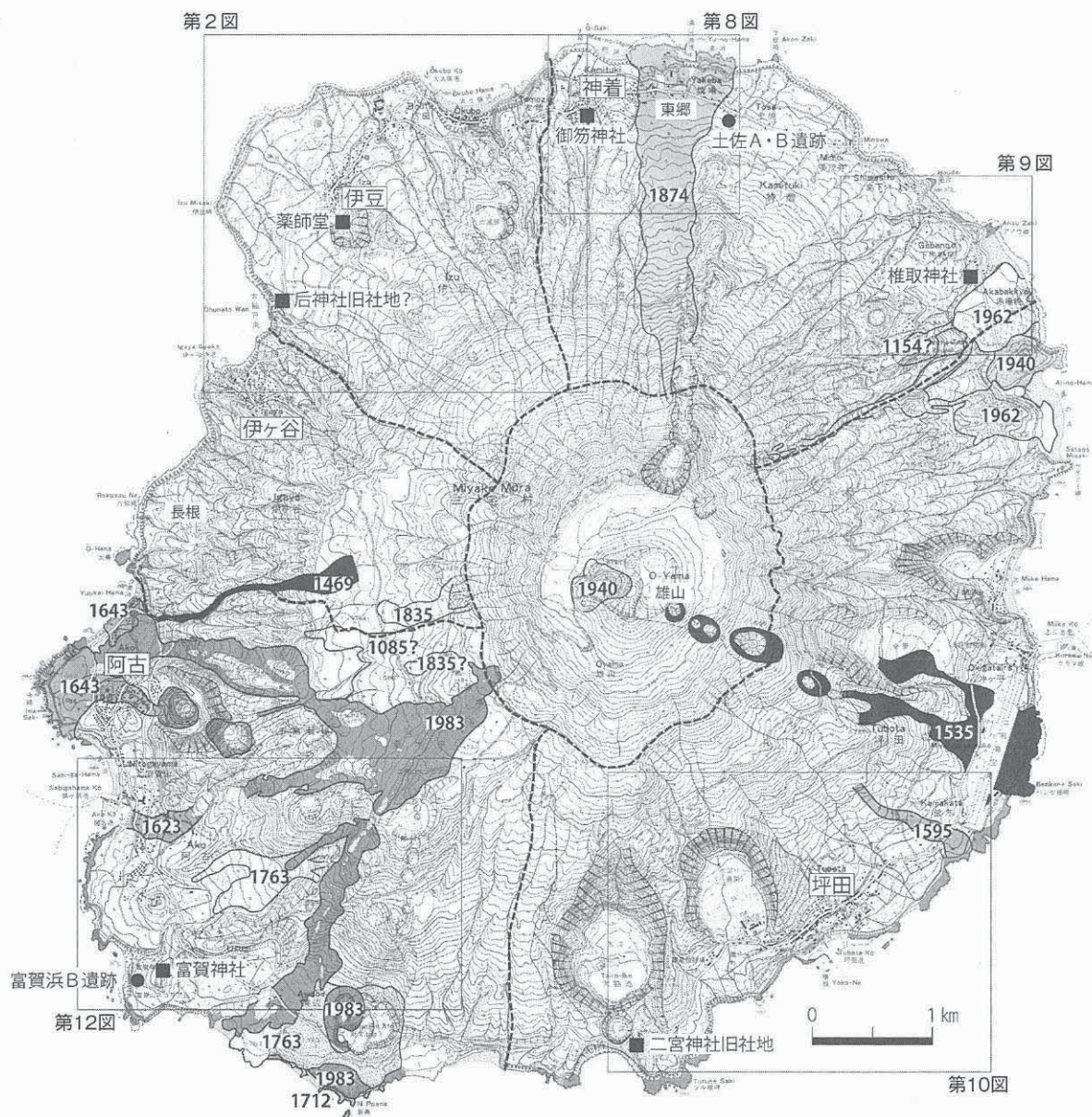
このような習俗を根底に持つ暮らしの中で、長く政治・宗教的主導権を握っていたのが島の神主たる壬生家であった。三嶋大明神の随神である壬生御館を祖とする壬生家当主は、大明神の御神体かつ、神の御代官のレガリアである「石の笏」を代々受け継いで、大明神との仲執り持ちを務めてきたのである(三橋1978)。同家などに伝わる『三嶋大明神縁起(三宅記)』には、①三嶋大明神による伊豆諸島の創造、②大蛇退治、③大明神の垂迹と壬生氏の由来が語られており、大明神の居所は阿古とされる。それは即ち富賀神社こと三嶋神社に相違なく、本地薬師如来を祀る伊豆薬師堂、后神を祭る神着御笏神社と共に三社堂と呼ばれて篤い崇敬を受けている。

ところで、『三宅記』は三宅島を三嶋大明神の本宮と看做しているが、これを単なる荒唐無稽な物語として退けるわけにもいかない。実際、伊豆半島では南部まで高塚古墳の築造が及ばなかったが、三宅島の富賀神社境内からは、古墳の副葬品と共通する金環などが出土した(三宅御蔵文化財総合調査団編1958)。また、その境内裏に広がる富賀浜からは、奈良三彩の破片が採集されており(三宅村教育委員会2008)、島が早くから国家的祭祀の重要な拠点と位置付けられていた可能性は否定できない。古代の伊豆諸島は、伊豆国賀茂郡三島郷の領域に含まれていたと考えられ、式内社が多いことも特徴の一つである。一方、寺院は浄土宗と日蓮宗に限られ、いずれも由緒に不明な点が多い。近世には、流罪になった日蓮宗不受布施派僧らが数多く来島した。

集落と遺跡の実態

ちなみに、文献記録に見られる噴火記録と地質分析の成果を対比してみると、久寿元(1154)年から文明元(1469)年までの間は、意外にも300年ほど噴火の休止期があったらしい(津久井・川辺・新堀2005)。この時期は、ちょうど積石信仰や、和鏡を用いた祭祀が盛んになった時期と重なっており、自然現象と文化現象との間に何らかの関係があったことを窺わせるものである。いずれにせよ、噴火は島の人々の生活に甚大な影響を及ぼす。特に、阿古や坪田は再三に亘る被害を被ってきた。比較的穏やかな神着でも、明治7(1784)年の噴火では、支村の東郷集落が埋没する憂き目に遭遇している。

勿論村落の移動については、噴火の影響のみならず、『三宅島年代見聞記』に記録された永享3(1431)年の長根村廃村や、文明3(1471)年の伊ヶ谷村創設など(浅沼悦1961、田代1990)、人為的側面からも事実関係を検討していく必要があろう。近世の状況については、文書や絵図面から一定の推測が成り立つものの、中世集落の実態は不明な点が多い。これまでに中世遺跡と認められた遺物包含地は、神着の土佐A・B遺跡と、阿古の富賀浜B遺跡のみであり(東京都遺跡地図作成調査委員会編1996)、積石塚や和鏡出土地との地理的關係を検討するためにも、遺跡分布調査成果の充実を期待する所である。(朝倉・佐藤・楠・山口)



第1図 三宅島の噴火年代と主要関連遺跡・社寺 (国土地理院1995一部改変)

第3章 調査経過

8月26日(水) 大学で機材を梱包した後、竹芝桟橋へ。22時、三宅島へ向けて出港。

8月27日(木) 5時、三宅島錆ヶ浜港に入港。仮眠後、三宅村教育委員会を表敬訪問。桜田教育長・野田教育係長に調査概要を説明する。また、役場税務係の浅沼氏を訪ね、地理情報の活用に関する打ち合わせを実施。午前中は、村立図書館にて地域史資料を収集し、和鏡伝世地として知られる阿古地区の八十司神社などを踏査。午後は、伊ヶ谷地区に移動して調査を続行。物見処遺跡から大船渡湾へ抜ける古道を降り、海岸転石の調査も試みた。

8月28日(金) 午前中は、伊豆地区を踏査し、薬師堂境内で積石遺構を確認。また、和鏡の出土・伝世地である神澤神社や、尾泉の積石などを巡った。午後は、神着地区の春家積石や、伊豆地区の落人姫・カムロの塚・腰元の塚などの位置情報を記録し、和鏡伝世地の姉川神社・土屋家屋敷神を踏査。伊豆七人山の積石などを再確認した後、一路東に向かい、神着地区の椎取神社で本日の調査は終了。なお、「落人姫」の伝承にまつわる塚の所在地は不明なものが多いが(池田1983)、「備後様」の積石が湮滅した事情について情報を収集することができた。

8月29日(土) 坪田地区の七人山や、和鏡の出土した旧松村家屋敷神・大長井積石・魔王神社跡を巡る。午後は、神着地区の島役所跡で石造物を調査。また、再び坪田地区に戻り、カドノブラ遺跡や二宮神社などを経て中郷周辺を踏査した。中郷では、新たに積石1基を確認すると共に、加藤信義氏のご案内を得て後藤守一氏が調査した地点を記録。夕刻、台風11号接近の報を受け、残念ながら31日まで予定していた調査の切り上げを決断。

8月30日(日) 早朝より、調査未了地点を阿古地区から時計回りに踏査。昼前までに、阿古地区の法華堂、伊ヶ谷地区の観音堂、神着地区の妙楽寺跡・観音堂・地藏堂、坪田地区の大般若供養塔・二宮神社旧社地などを調査した。14時、風雨の強まる錆ヶ浜港を出港。20時に竹芝桟橋へ接岸し、大学に機材を返却して解散。(佐藤・上田)



第4章 調査成果

三宅島の積石塚や、和鏡を用いた祭祀については、昭和30年代から考古学的研究の蓄積があるものの、未だその全容が周知されているとは言えない状況に留まっている。今も生きる信仰遺跡に特有なことだが、どこまでが考古学的検討の射程に入るのか、どこからが民俗学的検討の射程に入るのか測り難いところを、その理由の一つに数えることができるだろう（吉田1984）。実際、長く信仰の対象となってきた積石塚に伴う遺物は年代幅が広く、出土遺構の構築時期を特定することも容易でない。このような欠を補うためには、新旧を問わず、極力遺漏のないように島内の積石塚を集成していくことが、最も基礎的、かつ不可欠な作業として要求される。

本学の考古学実習調査では、これまで昭和57(1982)年度・昭和58(1983)年度・昭和63(1988)年度・平成20(2008)年度の4次に亘って大規模な遺跡分布調査を実施してきた（吉田編1983・1984・1989）。そこで今回は、新たにGPS機器を用いて測位精度の向上を図り、現下においては最も精緻な情報を集約することを目指した。しかしながら、神着大崎海岸の崖上に当たる「ハナアタ」では道路際に大量の円礫を積んだ遺構が認められたとする証言



第2図 伊ヶ谷・伊豆・神着地区

や、源為朝伝説にまつわる集石である伊ヶ谷大屋敷「ツブテ石」の実態（廣瀬1987）、そして神着の「ゴンゲンサマ」に多くの鏡が蔵されているとする記録の事実確認など（浅沼悦1973）、未だ調査成果に十全を期し得ていない点が幾つか残されている。なお不足の点については、一層の追及を継続すると共に、関係諸賢のご教示を乞うものである。

以下に提示するものは、『東京都遺跡地図』掲載の積石遺構や、和鏡出土・伝世地データを底本として（東京都遺跡分布調査会編1974、東京都遺跡地図作成調査会編1988、東京都遺跡地図作成調査委員会編1996、國學院大學海洋信仰研究会編1993）、これに既往の調査成果を反映した修訂を施すと共に、現地踏査で得られた新情報を追加したデータである。個々の事例に附した固有番号は、現行『東京都遺跡地図』の遺跡番号に準拠し、未だ遺跡地図に登録されていない遺跡には、No.52以下の連続する番号を与えた。なお、ここで紹介する遺構には、一定の高まりを持つ「積石」や、平面的な「集石」が含まれるが、個別の遺構名称としては全て「積石遺構」と呼んでおく。また、本文では各遺跡・遺構の特徴を掻い摘んで紹介するに止めた。詳細については、後に掲げた第1表～第3表を参照されたい。

（内川・深澤・石井）

第1節 伊豆地区

No.9 物見処遺跡積石遺構群（第2図・第3図、図版1-1～4）

西原の物見処遺跡は、観音下橋から100mほど南下した都道三宅巡環線の海側に位置し、伊ヶ谷地区との境である平山沢にも近い。南北は深い沢筋によって切られており、西側は大船渡湾や大野原島をはじめ、神津島・式根島・新島などを望む断崖に接している。そこは「物見処」、或いは「キサイ山」・「大崎宮」・「向浦」・「向倉」と呼ばれ、式内伊賀牟比賣命神社に比定される^{きさい}后神社の旧社地附近に当たるといふ（廣瀬1987）。現地の大型積石5基と小型集石1基の内、1号・4号・5号・6号積石遺構については、昭和57（1982）年から平成20（2008）年にかけて國學院大學考古学研究室が学術発掘調査を行った（吉田編1983～2000）。調査の結果、これらの塚は周囲に方形の溝を巡らせ、その内側に多量の円礫を積み上げて截頭方錐形に築いたものであり、小さいもので一辺約

6m、大きいものでは一辺約10mに及ぶ事実が判明している。いずれも、約1.5m前後の高さを誇り、全国的に見ても類例は少ない。この内、4号積石遺構と5号積石遺構は周溝を共有しているが、周溝内側の基壇部に角礫を多用するのは4号積石遺構のみの特徴である。また、塚状に積まれた円礫の一部には、經典の文字を筆写したと思われる墨書礫が見られることから、当遺跡が礫石経塚群としての性格も有していたことがわかる。遺構に伴う遺物は少ないが、宋銭や元代の龍泉窯系青磁碗片などが出土した。なお、かつて伊ヶ谷の長谷川佐次右衛門氏らが1号積石遺構を表面精査したことがあるそうだが、その時点でも和鏡は見られなかったとのことである（廣瀬1987）。

ちなみに、4号積石遺構の南端を破壊している切通しを降っていくと、海岸転石が散布する板崎浜へ出る。その途中に、「もろみどの碑」と呼ばれる往来安全のための碑があるが、これは流された不受布施派僧と見られる常源院日進が宝暦7（1757）年に建立したものである（三宅御蔵文化財総合調査団編1958・吉田編1983）。



第3図 伊豆地区No.9（拡大）

No26 神沢神社・宝山遺跡（第2図、図版1-5）

伊豆川に掛かる薬師橋から都道を約50m南に下り、薬師堂へ向かう参道を20mほど進んでから右へ曲がって道なりに歩いていくと、「神座明神」・「かんざやまさま」・「テイ天神」(佐藤1994) などと呼ばれる神沢神社の小祠が見えてくる。この神社は、式内社の弓良命神社、即ち『三宅記』にいう「八王子御前」が生んだ四男「てらい」を祀るものであるという。神社の北側は宝山と呼ばれ、昭和初期に浅沼悦太郎氏が2面～3面の和鏡を掘り出した(東京都遺跡分布調査会編1974、橋口編1975)。また、神澤神社には12世紀後半から15世紀半ばにかけての和鏡が33面伝世しているが[資料編鏡No31～No63]、少なくとも明治時代までは83面もの鏡が納められていたらしい(佐藤1994)。これらの鏡は、姉川神社の裏から出土した和鏡1面と共に、神社預主家であった大久保浜の島沢氏が管理するところとなっている。

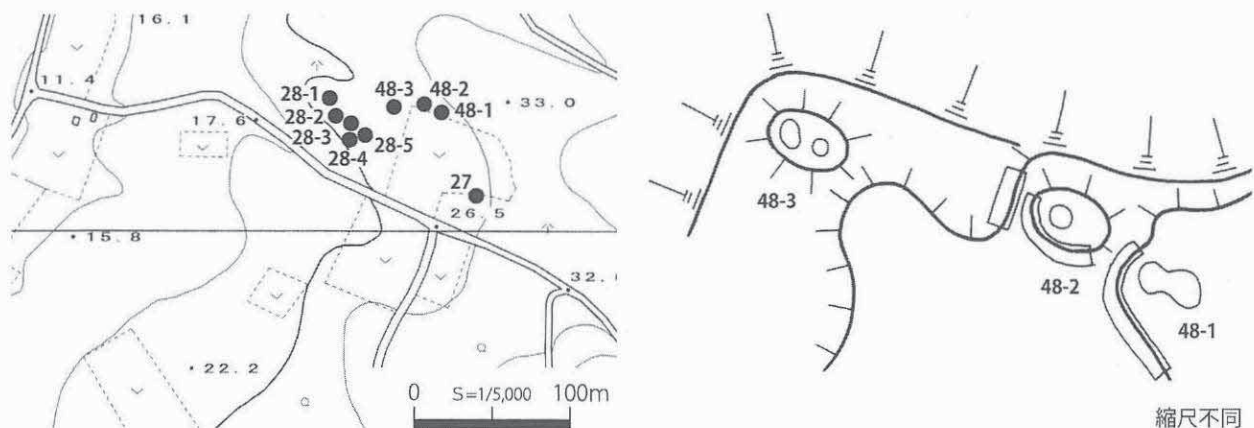
No53 薬師堂・薬師堂境内積石遺構（第2図、図版1-6）

三嶋大明神の本地仏を祀る東光山満願寺、通称薬師堂の境内西側に、少数の円礫を楕円形に配した集石がある。規模は径1m前後と極めて小さく、遺物も採集されていない。しかし、附近に花を生ける容器が埋め込まれていることから、何らかの信仰対象であったことは疑いなかろう。なお、当遺構との直接的な関係は不明だが、薬師堂のものとされる12世紀後半の洲浜桜樹双雀鏡については[資料編鏡No66]、その拓影が國學院大學蔵大場磐雄博士資料に残されている(國學院大學学術フロンティア実行委員会編2004)。また、奥の院とも呼ばれる隣接の御祭神社(御最前宮)付近では、昭和56(1981)年の分布調査時に年代不明の常滑製陶器片と、南宋の同安窯系青磁片を採集した(吉田編1982)。

No27 尾いずみ積石遺構／No28 尾泉遺跡積石遺構群／No48 尾イズミ積石遺構群（第2図・第4図、図版1-7）

倉沢橋から100mほど南の都道沿いに、伊豆岬の灯台へ向かう道が見える。そこを約20m進んでから右へ分岐し、約700m進んだ先のT字路は、ちょうど薬師橋から伊豆川を600m近く下った地点の南側に相当する。小字尾泉の積石遺構群は、この伊豆川南岸の一带に営まれていた(吉田編1983・1984)。ちなみに周辺の道路は、本来の地表面を切通し状に開削したものであるため、現状では道路の一段上に遺構が存在することになる。これらの積石遺構は、橋口尚武氏の報告以来(橋口編1975)、現行の遺跡地図上でもNo27尾いずみ積石遺構、No28尾泉遺跡積石遺構群、No48尾イズミ積石遺構群に分けて掲載されているが(東京都遺跡地図作成調査委員会編1996)、ここでは一括して紹介しておくこととしたい。

最も大規模な例は、T字路の突き当りを登った畑と林の境界に所在するNo27遺構の積石1基であり、主に角礫を用いて径約3m・高さ約1mの積石を形成している。一方、やや西側に位置するNo28遺構群には、積石2基と集石3基が存在するものの、いずれも角礫を主体とした小規模な遺構であり、特に集石の遺存状態は良好でない。伊豆川沿いの積石1基・集石2基からなるNo48遺構群は、川底に向かって三段に切土されており、最上段の積石と中段の集石は縁辺に石塁を持つ。また、中段と下段の集石は、楕円形に高まるマウンド上に集石を持つなど、些か特異な様相を呈している。但し、これらNo48遺構群も、角礫を多用する点では近在の例と共通している。



第4図 伊豆地区No27・No28・No48（拡大）、No48見取り図（吉田編1983）

No.25 伊豆七人山積石遺構（第2図・第5図、図版1-8）

伊豆集落に所在する下原荘の裏手は七人山と呼ばれ、海に向かって低くなっていく林の手前に1基の積石がある。主に角礫を用いて構築されていたようだが、タミの巨木によって内側から押し出されているため古態を留めてはいない。下原荘では、積石から出土したとされる柄鏡1面のほか（橋口編1975）、14世紀と15世紀の亀甲地文双雀鏡を各1面保管しているが[資料編鏡No.82・No.83]、これらの出土地点は不明である。なお、積石の背後には複数の立石や、新島産抗火石製の祠が祀られている。

No.24 伊豆土屋家屋敷神（第2図・第5図）

薬師橋から300mほど都道を北上した伊豆集落内の土屋氏宅には、タミの大きな木が茂る屋敷神があった。いまでは祠が新しく作り替えられてはいるものの、屋敷神の祭祀は今日も維持されており、12世紀後半の松喰鶴鏡2面・菊花双雀鏡1面・蓬萊鏡1面、13世紀半ばの梅枝鳥蝶鏡1面の計5面が伝世している[資料編鏡No.69～No.73]。この内、梅枝鳥蝶鏡は本調査で初めて確認した鏡である。二次的に被熱して表面が黒く変色したものや（橋口編1975）、鏡面が破損しているものも見られるが、その原因は判然としない。

No.3 草木積石遺構（第2図・第5図）

伊豆集落内の小字草木には、恐らく東京都が昭和47(1972)年の遺跡分布調査で確認したものと思われる積石1基が存在する（宮崎・永峯・小田1973）。但し、同調査の報告では、伊豆西原の積石遺構5基（No.9物見処遺跡）、伊豆下原荘内の積石遺構1基（No.25伊豆七人山積石遺構）、坪田中郷の小型積石9基を確認したとするのみで、当遺構については詳しい記述がない。原報告添付の遺跡地図には、それぞれ物見処遺跡・伊豆七人山積石遺構・草木積石遺構・坪田田中家屋敷神に相当するであろうドットが見え、本文には「中郷の積石遺構とは異なる大型の積石塚が2ヶ所計6基確認された」とある。伊豆七人山積石遺構や坪田田中家屋敷神は比較的小型の事例であるため、物見処の大型積石5基を除いた残りの1基が草木積石遺構に当たるものと解しておきたい。実際、遺跡地図には径8m・高さ2mもの規模を有すると記録されているが（東京都遺跡分布調査会編1974）、その現状は不明である。残念ながら今回の調査でも、所在地を確認することができなかった。

No.45 「落人姫」積石遺構（第2図・第5図・第6図、図版2-9）

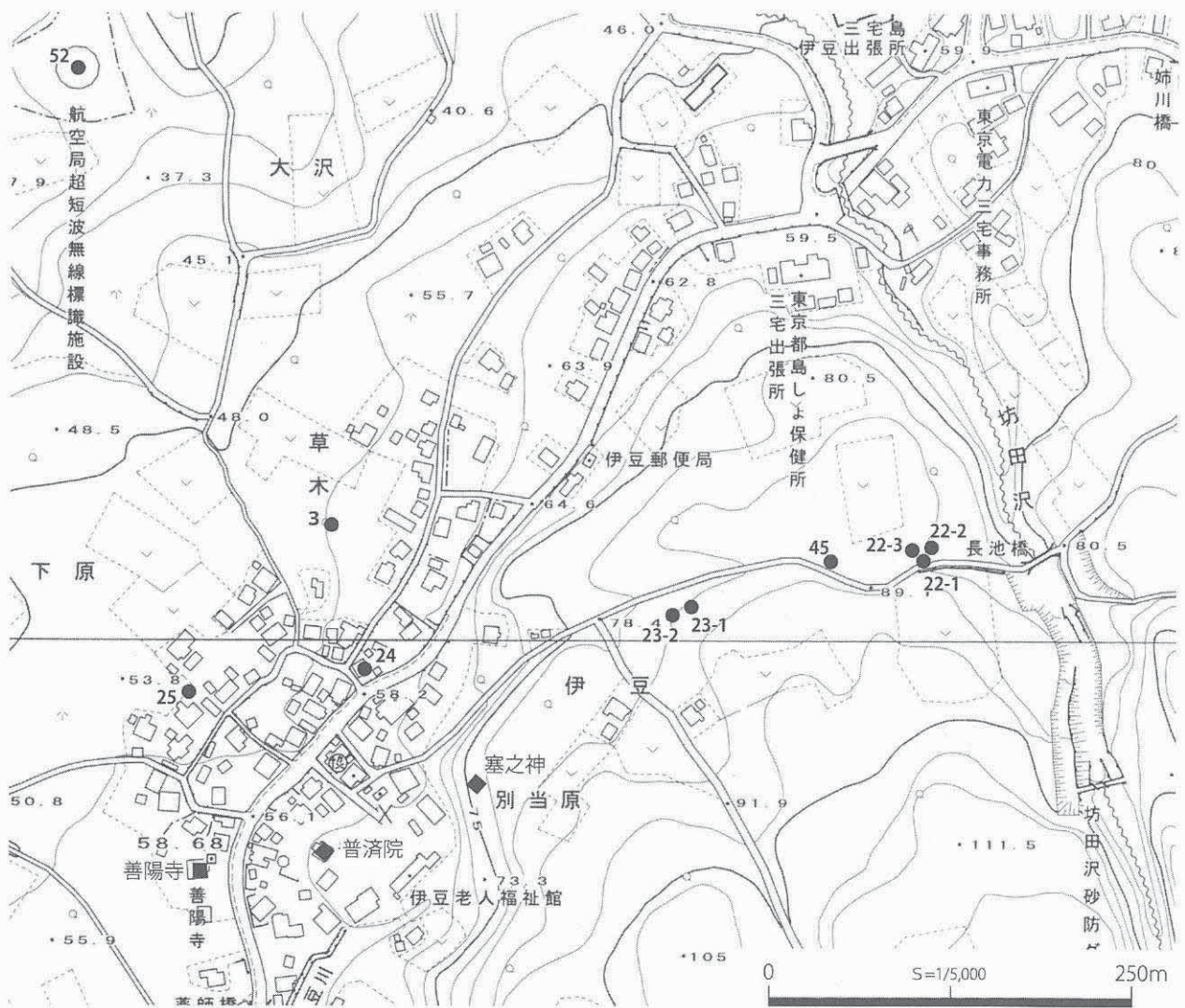
普濟院・伊豆老人福祉館や、別当原の賽之神附近から、一段山側へ登った旧道を250mほど姉川神社方面に向かうと、北側に「落人姫」の塚が見えてくる（橋口編1975、吉田編1983・1984）。伊豆地区には、平家の落人姫と従者の塚と伝えられる遺構が多数存在するが（池田1983、第6図）、これはその中心的存在であり、今日でも花が手向けられていることが少なくない。島人たちは、所々に散在する塚の由来について、落人姫の貴種流離譚という形で語り継いできたのである。積石の高さは約0.7m、長軸は約4.5mであるが、南半を道路の開削によって削られているため正確な規模は不明である。円礫を主体とする一方、遺構の西側には角礫も多数見られる。

No.23 「腰元の塚」積石遺構群（第2図・第5図・第6図、図版2-10・11）

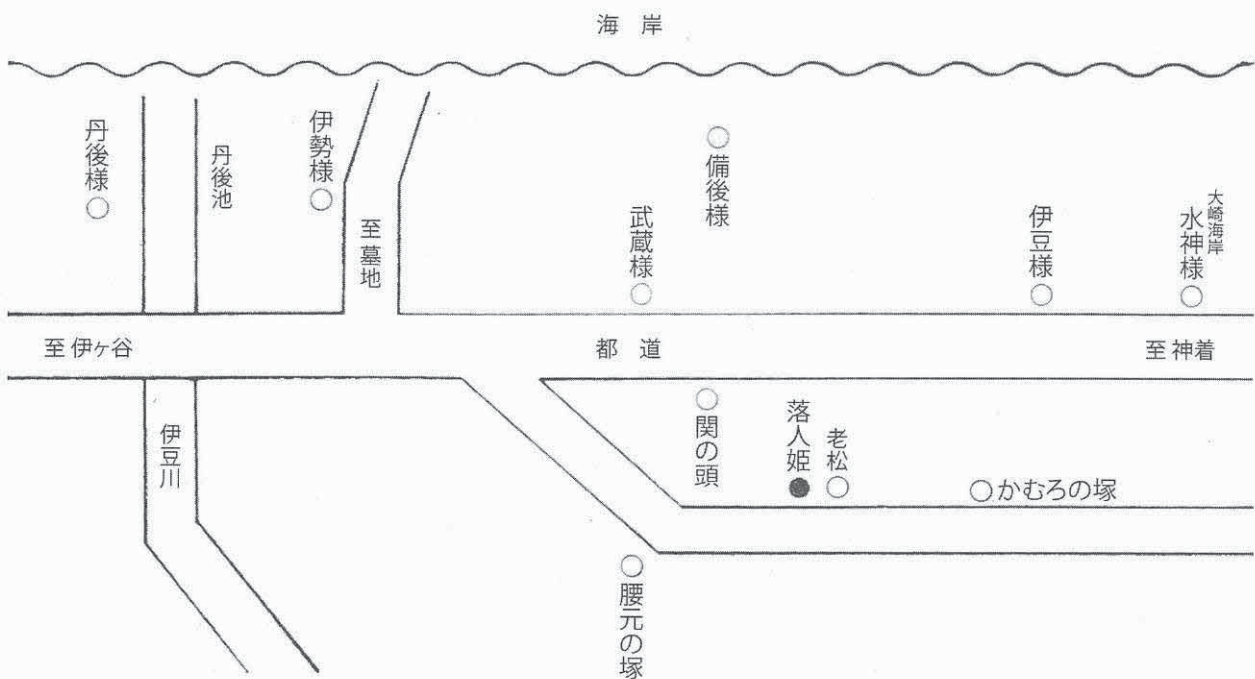
「落人姫」の従者と語られる「腰元の塚」積石遺構群は、No.45「落人姫」積石遺構から伊豆集落方面へ約150mほど戻った山側の畑にある。但し、この塚群の由来は、地主の方にも不明とのことである。橋口氏の報告では、畑の中に2基、ハンノキ林の中に1基の計3基存在するというが（橋口編1975）、本学の調査で確認できたのは2基であった。約15mの間隔を隔てて東西に並ぶ積石は、いずれも円礫と角礫を用いた径約1.5m～約2m、高さ約0.8m程度の塚であり、サンゴや鉄片が供えられていた（吉田編1983・1984）。

No.22 「カムロの塚」積石遺構群（第2図・第5図・第6図、図版2-12～14）

同じく「カムロの塚」積石遺構群も、「落人姫」の従者にまつわる塚とされ、No.45「落人姫」積石遺構から100mほど東、坊田沢に架かる長池橋まで約75mの地点にある（橋口編1975、吉田編1983・1984）。沢側に落ちる斜面の肩部に位置し、積石2基と集石1基が確認された。円礫を主体とし、径3mほどになるかと思われる1号積石遺構は、南半を道路に削られているため正確な規模は不明である。3号積石遺構は、約3m四方に礫が散在する集石に過ぎない。かつての『東京都遺跡地図』には、ここに6基の積石を記録する版もあったが（東京都遺跡分布調査会編1974）、3号積石遺構も本来存在した遺構の一つが崩壊した痕跡を残すものかもしれない。



第5図 伊豆地区No.3・No.22～No.25・No.45・No.52 (拡大)



第6図 落人姫伝説関係の塚 (池田1983一部改変)

No52「備後様」積石遺構（第2図・第5図・第6図、図版2-15）

「落人姫」伝説に関係する塚は、未だ現状を確認できていない例が多い。「備後様」の塚も従来記録されていなかった遺構の一つだが、旧地主の方から伺ったところに掘れば、成田国際空港開港に伴って設置された航空保安無線施設の地に積石塚が存在したという。塚は湮滅してしまったものの、その祭祀は場所を移して受け継がれている。池田信道氏の指摘通り、「落人姫」関連の塚は、家々の屋敷神同様に祀られているようであり（池田1983）、他の例も今後の調査で追加していくことが期待できよう。

No49 姉川神社（第2図）

No45「落人姫」積石遺構などが並ぶ旧道を、道なりに東へ進むと姉川を越えて十字路に出る。この十字路より手前の山側が姉川神社の境内であり、かつて神社預主家の島沢氏が、祠の裏側にて14世紀前半から中頃に属する菊花双雀鏡を掘り出したという（橋口編1975）[資料編鏡No64]。（深澤・林・吉田）

第2節 神着地区

No44 春家積石遺構群（第7図・第8図、図版2-16）

大久保浜を左手に眺めつつ都道を東へ進み、西川を越えると神着地区に入る。そこから100mほど先に、ようが沢に架かる門の原橋があるが、その手前海側の浅沼氏邸裏に春家積石遺構群がある。1号積石遺構は、一辺7.5mほどの方形を呈し、高さも約0.8mの規模を持つ。遺構の四辺に角礫を用いた基壇を築き、上部平坦面では径約2.3mの範囲に円礫の列石を設けているのが特徴である。東西を深い沢筋で画された旧村境付近に位置し、截頭方錐形の大型積石遺構を持つ点では、伊豆地区のNo.9物見処遺跡と類似している。なお、近くに小規模な積石が1基あるというが（橋口編1975）、現在は草木が繁茂しており確認することができない。

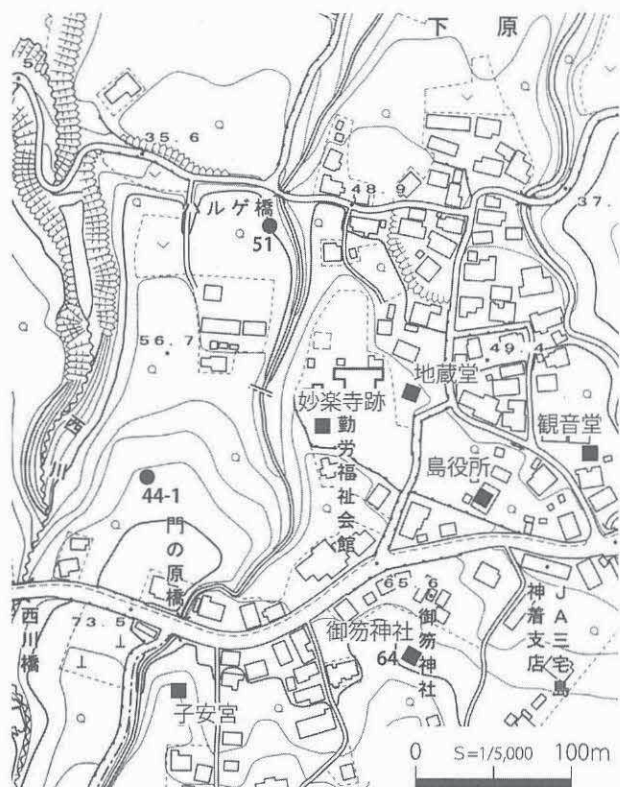
No51 春家北積石遺構<春家第2積石遺構>（第7図・第8図）

No44春家積石遺構群の海側にある旧道を一段降ると、かつて浄土宗栄昌山妙楽寺が置かれていた勤労福祉会館（旧神着小学校）裏のようが沢に出る。沢の手前右側には、径約1.5mの積石が1基あるというが（橋口1975）、

本学の調査では確認できていない。

No64 御笏神社（第7図・第8図）

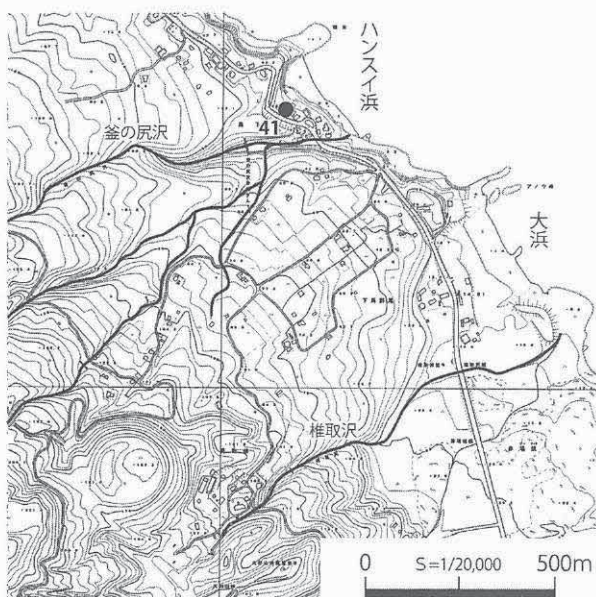
御笏神社は、神着地区中心域の旧島役所（壬生邸）周辺を境内とする。延喜式内社の佐伎多麻比咩命神社や、『三宅記』に見える三嶋大明神の後、「八王子の御前」に相当する古社であり、壬生家の祖である壬生御館が三嶋大明神から授かった「石の笏」が御神体という。近辺には分家である壬生久左衛門家の観音堂（広光山興濟寺）や、久右衛門家の地藏堂などが集中して営まれており、観音堂は御笏神社の本地堂と考えられる。伝えに拠れば、かつては明治7（1874）年の噴火で埋没した東郷、即ち現在の小字焼場に鎮座していたが（第1図）、永正13（1516）年に現在地へ遷座したという。明治16（1883）年に社叢から和鏡が出土したが（橋口編1975、三宅島史編纂委員会編1982）、その消息は判っていない。現在、御笏神社が蔵している和鏡11面は[資料編鏡No1～No11]、その一部、もしくは全部が阿古の富賀神社から移されたものという（三宅御蔵文化財総合調査団編1956、橋口1975）。



第7図 神着地区No44・No51・No64（拡大）



第8図 神着地区（北部）



第9図 神着地区（東部）

No.41 釜の尻積石遺構（第9図）

椎取神社付近から1kmほど北上すると、島の北西に広がるハンスイ浜へ出る。釜の尻積石遺構群は、この浜に面した崖面から発見されたという（橋口編1975）。その近くにも、もう1基の積石が存在するらしいが、今のところ詳細は不明である。
（深澤・林・吉田）

第3節 坪田地区

No.60 大里遺跡積石遺構群 東群／No.61 大里遺跡積石遺構群 西群（第10図）

弥生時代を中心とする遺跡として知られる大里遺跡の東側に、集石2基と積石4基が存在する。これらは、大里遺跡の範囲確認を目的として、平成8（1996）年に東京都教育委員会が実施した調査で確認された（青木・内川・山本・金成1998）。現地は、坪田中心域を縦断する筑穴沢の河口附近にあたり、すぐ目の前には大海原を望むことができる。集石群と積石群は、互いに75mほど離れた地点に位置しているため、ここでは前者をNo.60大里遺跡積石遺構群東群とし、後者をNo.61大里遺跡積石遺構群西群と呼んでおこう。いずれの遺構も、主に角礫を用いた小規模なものに過ぎないが、径約0.7mの比較的大きな礫を中心に据えたNo.60地点の2号積石遺構（2号集石）は、周囲にサングを多く配している点の特徴である。

No.40 お長井積石遺構（第10図・第11図）

お長井積石遺構は、坪田集落を縦断する筑穴沢のお長井橋から130mほど東の山側に位置し（東京都遺跡分布調査会編1974）、都道に沿った松村氏邸宅と奥山氏邸の間に営まれている。径4m程度の範囲に礫が積み上げられていたというが（橋口編1975）、当調査では確認できていない。比較的大型の事例と見られるため、是非とも実態の把握が望まれる。

No.38 大長井積石遺構群（第10図・第11図、図版3-17）

筑穴沢に架かる大長井橋の東側には、筑波製材所が設けられている。かつて坪田カドノブラから製材所を移す際に、現地に存在した2基～3基の積石が整理され、実にトラック2台分もの円礫が運び出された（橋口編1975）。地主の筑波氏によると、製材所敷地の隅には複数のタミノキがあり、その根元に積石が存在したという。その内、1号積石遺構を整理している最中に、12世紀前半から中頃の梅花双鳥鏡が出土した〔資料編鏡No.74〕。旧来の遺構は失われ、鏡は筑波氏が保管しているが、積石の跡には新たに小祠が設けられている。なお、そもそも現地は海蔵寺が管理する土地であったといい、積石近辺で採集された宝篋印塔は同寺に保存されているそうである。



第10図 坪田地区

No.37 坪田筑波家屋敷神 (第10図・第11図)

筑波氏は、上述した大長井積石遺構群出土和鏡のほか、15世紀の菊花散双雀鏡を所蔵している〔資料編鏡No.75〕。これは、田ヶ沢に沿った氏の苗場附近から偶然発見されたものであるという（橋口編1975）。そこには、タミの大き木が茂る禁足地が設けられており、この鏡は屋敷神に奉納されていたものと考えられる。

No.58 中郷遺跡積石遺構群 東群<中郷遺跡> (第10図・第11図、図版3-18)

筑穴沢に架かる大長井橋から約25m西へ進んで山側へ曲がると、そこから70mほどの地点に中郷遺跡積石遺構群東群が存在する。遺跡の位置する地点は、海側へ傾斜した緩斜面に当たり、筑穴沢沿いの林に1号積石遺構と呼ばれる積石1基と、2号積石遺構と呼ばれる集石1基が残されていた。昭和56(1981)年には、國學院大學考古学研究室が学術発掘調査を実施しており（吉田編1982）、径1.4mの集石である2号積石遺構の下部に浅い土坑が穿たれていた事実が明らかとなっている。ここから林内を30mほど北西方向に進むと、一段上の切土に3号積石遺構と称する集石があるが、これは発掘せずに現地で保存している。いずれの遺構も円礫を主体として構築されており、サンゴが捧げられていることを特徴とする。また、2号積石遺構と3号積石遺構では、貝殻なども採集した。

No.36 旧坪田松村家屋敷神<坪田桑原氏宅積石遺構・中郷B遺跡> (第10図・第11図)

No.58中郷積石東群から少し山側の十字路を左折し、ほぼ等高線沿いに200mほど南下すると、その山側に桑原氏宅がある。苗場の朽ちたタミノキ周辺には、円礫を径1.5mほどの範囲に積み上げた積石が存在し、ここに捧げられていた13世紀前半の桜花双鳥鏡1面と、16世紀の蓬莱鏡1面が、旧地主の松村氏に保管されている（橋口1975）〔資料編鏡No.76・No.77〕。また、桑原氏が苗場の積石を整理した際に、板石の下から12世紀後半の鶴亀鏡が出土したという〔資料編鏡No.78〕。平成3(1991)年には、國學院大學海洋信仰研究会が周囲の精査を実施したとこ



第11図 坪田地区No.12・No.34～No.38・No.54・No.56・No.58・No.59 (拡大)

ろ、径約3mほどの範囲に円礫が散在していたが、顕著な遺物等は見られなかった（青木・内川編1994）。なお、明治初年までは桑原氏宅の一段上に社が存在したという報告もある（橋口編1975）。

No.12 中郷遺跡積石遺構群 西群<中郷遺跡>（第10図・第11図、図版3-19・20）

No.58中郷積石遺構東群から少し山側の十字路を左折し、ほぼ等高線沿いに300mほど南下すると、都道へ向かって左へ降りる手前に、右の山側へ折れる道が見えてくる。そこから約100m～約250m上に広がる田ヶ沢北岸の緩斜面一帯に、大小の積石や集石が集中して営まれているが、ここは東京都による三宅御蔵文化財総合調査の一環として、昭和31(1956)年に後藤守一氏らが調査を行った地点に当たり、学史的にも重要なポイントである（後藤・梅沢1958）。今のところ、都の調査で記録された7基、本学の調査で記録した5基の遺構が知られており、その内12号積石遺構と呼んでいる集石は、今回の調査で新たに確認した。遺物の出土した例について掻い摘んで見ておくと、径2mを越える大型の1号積石遺構・2号積石遺構・3号積石遺構からは和鏡が出土している[資料編鏡No.67・No.68]。このうち3号積石遺構では、加えて青磁片や常滑製品の破片、そして提子の注口が見つかった。更に、8号積石遺構・9号積石遺構や、11号積石遺構と呼ぶ集石から常滑製品の破片などを採集した（吉田編1989）。また、4号積石遺構とされる集石の下部には土坑が穿たれており、No.58中郷積石東群2号積石遺構との共通性が興味深い。今回は、3号積石遺構の地主である加藤氏よりご案内を頂き、現地を確認することが可能となった。なお、正式な発掘調査で確認された島内唯一の和鏡である3号積石遺構出土鏡は、13世紀半ばから後半に属する菊花双雀鏡であり[明大博No.B-242、資料編鏡No.67]、現在は明治大学博物館（旧明治大学考古学陳列館）が所蔵している（三宅島史編集委員会編1982、明治大学考古学博物館編1988）。

No.59 坪田七人山積石遺構群（第10図・第11図、図版3-21）

No.58中郷積石遺構東群から少し山側の十字路を山側へ道なりに上り、大きな左カーブを過ぎると比較的広い平坦面に出る。この筑穴沢と田ヶ沢に挟まれた地には、現在金戸霊園が営まれており、その海側の斜面地に坪田七人山積石遺構群がある。ここを「七人山」と称する謂れは、落人伝説、或いは飢えた子供が作物を盗んだことに端を発して非業の死を遂げた七人家族の物語に基づいているという（池田1983）。その名の通り7基存在する積石は、いずれも角礫を主体として周囲1mほどの範囲に角礫や円礫を積んだものである。近片にも角礫が散在する地点が幾つか見受けられるが（吉田編1984）、明らかに塚状を呈するものは以上の7基に限られた。

No.35 上原遺跡（第10図・第11図）

No.59坪田七人山積石遺構群から、200mほど西に向かうと田ヶ沢に出る。かつて、その近辺で村道工事を行った際に12世紀後半の山吹散双雀鏡が出土した（東京都遺跡分布調査会編1974、橋口編1975）[資料編鏡No.80]。正確な出土地点は確認できないが、鏡は松村氏の保管するところとなっている。

No.34 坪田田中家屋敷神積石遺構（第10図・第11図、図版3-22）

都道に沿った坪田郵便局の斜向いに、田中氏の屋敷がある。ちょうど現地は田ヶ沢の南岸に当たり、居宅の裏手に屋敷神が祀られていた（三宅御蔵文化財総合調査団編1958、橋口編1975）。そこには円礫を用いて瓢形に組まれた範囲2mほどの集石が存在するが、後側は礫を積み上げたような形態を呈し、前には礫を敷き詰めている。かつて、ここから地主の田中氏が13世紀前半の山吹双雀鏡を発見した[資料編鏡No.79]。

No.56 魔王神社旧社地（第10図・第11図）

坪田郵便局と三宅村公民館の間を海側へ50mほど下りると、斜面右手に旧坪田保育園が見える。この一帯は小字鍛冶原と呼ばれ、明治初年まで魔王神社の神域として畏れられた社叢があった。しかし、明治12(1879)年の小学校開校に伴う運動場整備や、明治23(1890)年前後に行われた地区内神社24社の廃止などを経て、次第に神域が荒廃したらしい。そして、明治41(1908)年に運動場を整地するため魔王神社の跡地を切り崩したところ、常滑の大甕と10数面の和鏡が出土した（浅沼金1969b、浅沼悦1973、橋口編1975）。これらの出土品は、隣接する天満宮（天神社、現在の二宮神社）に納められている。ところで、坪田では島内の他地域以上に神社整理が進められ、既に明治24(1891)年には、小倉山の二宮神社さえ参拝の便のため天満宮にて併せ祀られるようになっていた。二宮神社が正式に天満宮へ遷座したのは昭和30(1955)年のことであり、地区内の諸神社を合祀して現在に至ってい

る。現在、同社には18面の和鏡が保管されているが[資料編鏡No.13～No.30]、魔王神社旧社地出土の鏡に加えて、後に坪田地区の積石から出土した鏡も含まれているため、個別資料の確実な出土地点は明確でない。

No.54 法華供養塔・カドノブラ経塚 (第10図・第11図)

ちょうど都道と田ヶ沢が交わる地点には、表裏に「法華供養塔」・「金毘羅大権現」と刻まれた供養塔と、一字一石経を埋納したカドノブラ経塚がある。現在は失われているものの、かつては坪田集落の旧東境に当たる現地にタミの太木を伴う塚が存在しており、村内へ疫病が侵入することを防ぐため、その地下に経石が埋められているとの伝えが残されていた(浅沼金1969b)。ところが、昭和49(1974)年に供養塔を移動することとなり、解体作業が進む中で実際に経石が出土したことから、期せずして伝承の正しさが明らかになったのである。また、偶然ながら文化庁を主体とする文化財調査が島内でも行われており、遺構・遺物の出土状況について記録できたことも幸いであった(橋口編1975)。記録によれば、供養塔の下には南北約1.2m・東西約1mの土坑が穿たれているという。その壁面は大型の墨書礫22点で囲繞され、内側には1万点もの経石が納められていた。また、墨書の内容から判断すると、この経塚は大機和尚が享和2(1802)年に建立したものであることが知られる。江戸の曹洞宗宿鳳山高円寺隠居であった彼は、寛政12(1800)年に罪を得て三宅島へ流された僧であり、伝承で「大教和尚」と語られてきた人物に当たる。

No.57 大般若供養塔・道の沢経塚 (第10図、図版3-23)

No.54カドノブラ経塚から、都道を300mほど西に向かうと、坪田集落や三宅高校を過ぎて道の沢に出る。この沢に架かる橋の袂に、「大般若供養塔」と刻まれた石塔があるが、一見して原位置を保ったものでないことは明白である。ここでは道路拡張の際に、カドノブラ経塚と同様の墨書礫が出土したらしいが、全て海中に投棄されたようであり詳細は不明と言わざるを得ない(浅沼金1969b、橋口編1975)。しかし、この塔がカドノブラの供養塔と対をなす存在である事実は疑いなく、両塔の石材が接合する事実も伝承と符合する。(深澤・林・吉田)

第4節 阿古地区

No.63 富賀神社 (第12図)

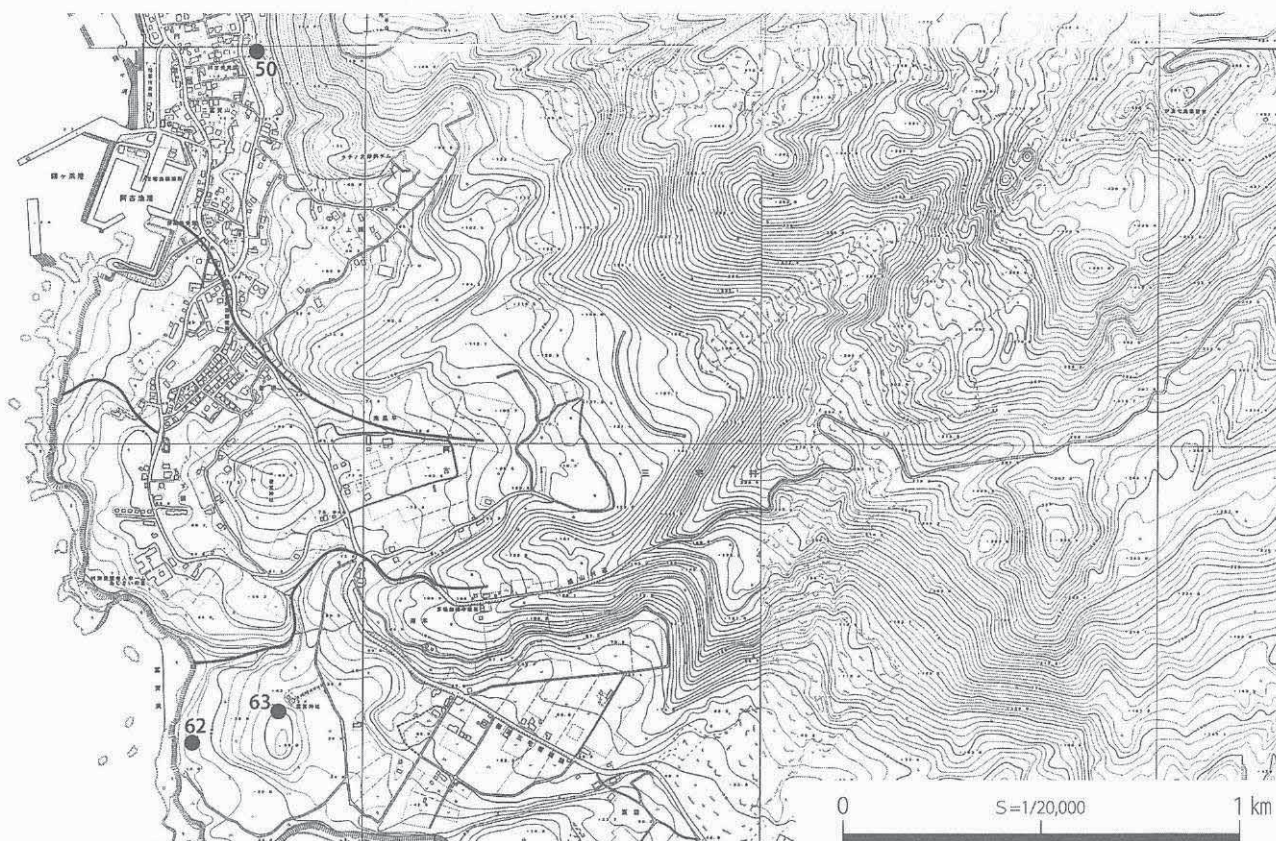
都道と雄山林道が交わる五叉路を、鳥居が立つ海側の道へ曲がって300mほど行くと、かつては鬱蒼とした森であった富賀神社^{とが}の境内中心域に至る。この富賀神社こと三島神社は、式内阿米都和気命神社に比定される古社であり、大野原島を望む富賀浜から奈良三彩の破片が採集されているように(三宅村教育委員会2008)、少なくとも奈良時代から国家的祭祀の場として機能していた可能性がある。また、降って15世紀の成立と見られる『三宅記』は(三橋1978)、阿古を三島大明神の居所と伝えており、実際に富賀神社は、御笏神社や薬師堂と共に三社堂と呼ばれ、三宅島惣鎮守として崇敬を集めた。また当社では、被熱した11面の和鏡や薬師如来の懸仏などを所蔵していた(三宅御蔵文化財総合調査団編1956)。現在は、その一部、もしくは全てが神着の御笏神社に移されており(橋口編1975)、后神社所蔵の1面と共に、島の神主家である壬生氏が管理している。

No.62 西之御門積石遺構 (第12図、図版3-24)

富賀神社を過ぎて道なりに800mほど進むと、富賀浜自然公園の駐車場に出る。そこから先の浜辺は、ちょうど富賀神社本殿が鎮座する富賀山の西側に当たり、沖には大野原島、内陸には若宮神社の鎮座する下鎗の丘を見渡すことができる。大野原島を正面に見据えた場所に設けられた鳥居の周辺は「西之御門」と呼ばれ、沖合から富賀神社を遙拝する目標となっているという(佐藤1994)。火山ガスの影響によって、最近まで一帯が立ち入り禁止区域に指定されていたため、以前に比べて見通しは良くないが、鳥居の手前に礫群の集中する箇所がある。

No.50 八十司神社 (第12図)

鎗ヶ浜港から都道に出て200mほど北上し、荒島神社より一本手前の道を山側へ曲がると、突き当りの山際に^{やつし}八十司神社がある。かつては祠の前に置かれていた鰐口に13世紀の菊花双雀鏡が1面納められていたという(橋口編1975)[資料編鏡No.65]。現在これらの鏡は、三宅村教育委員会の所蔵となっている。(深澤・林・吉田)



第12図 阿古地区

第5節 伊ヶ谷地区

No.65 后神社 (第2図)

后神社は、大船戸湾を望む伊ヶ谷港に所在する。式内伊賀牟比咩命神社や、『三宅記』に見える箱根の「嫡女」に相当する古社であり、14世紀の菊花散双雀鏡1面を蔵する〔資料編鏡No.12〕。No.9物見処遺跡の附近が旧社地と見られ（廣瀬1987）、伊ヶ谷集落の創設年とされる文明3（1471）年に現在地へ動座したとも伝わるが、その実際は不明と言わざるを得ない。しかしながら、『三宅記』が伊豆の入海と呼んでいる伊ヶ谷の浦には、この嫡女が自らの子を抱いて入水し、石神となった伝説が残されており、后神社も古くからの石神信仰と無関係の神社ではないようである。

（深澤・林・吉田）

第5章 総括

成果の概要

今回の調査では、これまで多年に亘って様々な機関が調査を進めてきたものの、充分整理がついていなかった三宅島の積石遺構や和鏡出土・伝世地の実態について、統一的な視点から俯瞰することを目指した。ここまで概観した通り、積石遺構の実態は多様であり、従来指摘されてきた年代的 position 付けの困難さも一朝一夕に克服できるものではない。しかしながら、新たに発見した遺構・遺物を含めた考古学的、或いは民俗学・人類学的な基礎情報の整理が進んだことは、文化財、ひいては島の文化を保護・保全する観点からも重要な成果と位置付けることができる。我々の調査では、未だ直接確認できていない事例も残されてはいるが、埋蔵文化財の保護は分布調査の精度に負うところが大きいことを改めて強調しておきたい。

また、調査対象の測位にGPSを用いて一層正確な地理情報を入手したことにより、周辺景観と積石や和鏡出土・伝世地の関係について、これまで以上の検討を及ぼすことが可能となった。特に、加藤信義氏のご案内により、昭和31(1956)年の三宅御蔵総合調査時に発掘されたNo12中郷積石遺構西群3号積石遺構を踏査・測位できたことは特筆し得る成果である。何となれば、同調査時に記録されたものの現状確認が難しい遺構や(三宅御蔵文化財総合調査団編1958)、これまで本学が調査してきた周辺の事例について(吉田編1989)、併せて正しい位置の把握が実現できたからに他ならない。

なお、現地調査と整理作業の過程で、大場磐雄博士資料に収められた薬師堂所蔵鏡の拓影を含め、新たに複数の三宅島関係の和鏡を確認した(國學院大學学術フロンティア実行委員会編2004)。今のところ、三宅島出土・伝世の和鏡は、橋口集成による78面(橋口編1975)、國學院大學海洋信仰研究会集成による83面を経て(國學院大學海洋信仰研究会編1993)、総数87面に至っている。その内、No12中郷積石遺構西群3号積石遺構出土の菊花双雀鏡については(後藤・梅沢1958)、昭和31(1956)年度調査出土資料を村松仲右衛門氏と旧明治大学考古学陳列館が保管しているとする記録に頼って検索してみると(伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会編1981)、果たして明治大学博物館所蔵資料の中に同鏡と思われる資料を見出すことができた(明治大学考古学博物館編1988)。改めて現品を調査する必要もあるが、原報告の拓影と比較すると、鏡背文様のみならず范傷まで一致しており、両者が同一資料であることはほぼ疑いないだろう。

積石遺構・遺物の実態と年代観

それでは、調査成果を受けた具体的な研究見通しについても若干言及しておこう(第1表～第4表参照)。三宅島や伊豆諸島の積石遺構については、既に後藤守一・梅沢重昭両氏、橋口尚武氏、そして内川隆志氏らが類型化を試みてきた(後藤・梅沢1958、橋口編1975、内川1994)。もっとも、No12中郷積石遺構西群4号積石遺構や、No58中郷積石遺構東群2号積石遺構のように(吉田編1982)、発掘調査結果から遺構下部に土坑を持つ事実が判明した例があり、表面的形態のみならず内部構造にも多様性が認められる。また、屋敷神と伝承されるものや、墓と言われる遺構もあるが、形態・規模・石材などに特段の偏りは見受けられず、両者を截然と区別することは難しい。

とは言え、大型のNo9物見処遺跡例や、No44春家積石遺構は、共に截頭方錐形を呈しており比較的規格性が高い。また、遺物が伴う遺構は、やはり多少形が整った事例に多い傾向も認められる。石材については、やや海岸から遠いNo59坪田七人山積石遺構群などが角礫を主体とする理由を、海岸転石の採集が容易か否かに求めることもできよう。しかし、海に近いNo27・28・48の伊豆尾泉でも主に角礫を用い、円礫が従属的である場合も見受けられる。今後は、海岸転石の散布地から遺跡までの移動コストについても検討を及ぼすべきであろう。

ところで、改めて言うまでもないが、年代的な位置付けが明確な積石遺構や和鏡出土地は、これまで殆ど認められていない。和鏡の年代は、平安時代末期から室町時代に及び、No36旧松村家屋敷神例のように、同一遺構から出土した鏡でも著しい時期差が看取される場合もある。但し、一部の積石遺構に見られる陶磁器は、和鏡の年代と著しく外れるわけでもない。むしろ、明らかに近世に及ぶ遺物が、No25伊豆七人山積石遺構出土の柄鏡程度

に限られる点に聊か気を惹かれる。一方、No54カドノブラ経塚は、墨書礫の記載から間違いなく享和2(1802)年の造営と判断できる(橋口編1975)。これと対をなすNo57道の沢経塚も、恐らく同じ19世紀初頭に属するものであろう。疫病の侵入を防ぐため、坪田集落の境界に経石を埋納したという言い伝えの正しさが考古学的に証明された事実は、ほぼ正確なエピソードが170年以上も伝承されたことを示している。

換言すれば、全く由来の語られていない塚については、これより遡るものと考えた方が良いのかもしれない。実際、No9物見処遺跡の4号積石遺構は、浜へ降る切通しによって一部を破壊されており、その路傍には宝暦7(1757)年銘の往来安全祈願碑が建てられていた(三宅御蔵文化財総合調査団編1958・吉田編1983)。この碑が原位置を保っていると認めるならば、物見処遺跡は遅くとも18世紀半ばに至るまでに本来の機能を停止し、人々の記憶から忘れ去られていた可能性が高い。周囲に溝を巡らす形態も中世の塚墓に類似しており(松原1994)、墨書礫を持つ点では共通する近世のNo54カドノブラ経塚・No57道の沢経塚とは、時期を異にしていると考えて良いだろう。

積石遺構・和鏡出土地と景観

ともあれ、ここでは本調査の主要な成果である積石遺構や和鏡出土地の地理的な位置付けについても触れておくべきであろう。上述したように、個々の遺構の存続期間については大まかな理解に止まらざるを得ず、必ずしも時期的に併行しない事例まで同一の平面上で見えていかねばならない憾みはあるが、積石遺構や和鏡出土地の占地傾向は、①類：沢筋に沿う緩斜面に群在するもの、②類：現在の集落中心域より一段上の平坦面に群在するもの、③集落中心域の平坦面に存在するものの3類型に大別することができる。

比較的多数の遺構が認められる伊豆地区や坪田地区の具体例に沿って見ていくと、①類としては伊豆の小字尾泉にあるNo27・No28・No48遺跡やNo49姉川神社、坪田のNo38大長井積石遺構群・No12中郷積石遺構群西群・No58中郷積石遺構群東群などがこれに相当する。中世の土地利用形態は不明だが、阿古地区を除く近世の集落中心域は今日の状況と大きく異ならないと見て良く(宮崎1984)、特に坪田地区では、No54カドノブラ経塚とNo57道の沢経塚によって19世紀初頭の集落出入り口が画されていた。そうすると、和鏡などの豊富な遺物を持つ①類の多くは、近世以来の集落域から些か外れた地点に位置することになる。

同様に、伊豆地区の旧道沿いに位置するNo45「落人姫」積石遺構・No23「腰元の塚」積石遺構群・No22「カムロの塚」積石遺構群や、坪田集落の一段上に位置するNo59坪田七人山積石遺構群など、②類の事例も近世の集落域とは重複していない。落人姫の物語など、何らかの伝説を伴う事例が多いのは、本来の機能が忘却された後に積石遺構群の意味を解釈しようとした結果であろうか。落人姫関係の積石遺構群も、坪田七人山の積石遺構群も墓と伝わるものであるが、少なくとも近世から伊豆・坪田の各集落で墓地としてきた場所とは大きく離れている。中には、構築当初に期待された役割からは変容しつつも、新たな意味が与えられて信仰の対象となったものも含まれるに違いない。

一方、③類に属する遺構は、構築年代が明らかとは言い難いものの、現在も屋敷神として機能している事例が多い。三宅島では、家移りに際して屋敷内に地主神を祀る風習があり、その修繕も古くから行われてきた(三宅島史編纂委員会編1982)。そうすると、島内に散在する塚の一部には、絶えた家の地主神なども含まれるかもしれない。このような可能性については、中近世遺跡の実態が明らかでない今、字境図なども活用しつつ土地利用の展開を跡付けていくことが肝要である。

ともあれ、現時点では三宅島の積石遺構や和鏡出土地について実態を整理し、帰属年代の推定や、立地傾向の背景を紐解く糸口を得たに過ぎない。今後は、集落・墓域や、積石構築材の推定収集地を含めた周辺の状況を把握し、積石信仰を取り巻く島の景観が中世からどのような変容過程を経て今日に至ったのか検討していく必要がある。(深澤・石井)

引用・参考文献

- 青木豊・内川隆志編 1994『御蔵島 神ノ尾遺跡』國學院大學海洋信仰研究会神ノ尾遺跡學術調査団
- 青木豊・内川隆志・山本哲也・金成南海子 1998「都指定史跡 三宅村 大里遺跡」『都内重要遺跡等調査報告書－西ヶ原貝塚・丸山貝塚・大里遺跡・相原窯跡－』 都内重要遺跡等調査会
- 浅沼悦太郎 1961『改訂増補 三宅島歴史年表』
- 浅沼悦太郎（浅沼渉編） 1971～1973「火の島記録」1～7『民間傳承』No293～No299 民間傳承誌友会
- 浅沼金一郎 1969a『三宅島の文化を尋ねて』 孔文堂
- 浅沼金一郎 1969b『坪田の起源と文化』 坪田の起源と文化刊行会
- 池田信道 1983『三宅島の歴史と民俗』 伝統と現代社
- 伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会編 1981『伊豆諸島東京移管百年史』上巻・下巻 東京都島嶼町村会
- 任章赫 1990「三宅島における土地利用－伊豆・坪田を中心に－」『伊豆七島における島世界の民俗学・文化人類学的研究－空間（海・島・山）と儀礼をめぐる』平成元年度科学研究費補助金（一般研究A）研究成果報告書（研究代表者 牛島巖 課題番号62410007）
- 内川隆志 1994「伊豆諸島における集石遺構の類型」『伊豆利島 堂ノ山神社境内祭祀遺跡』 利島村教育委員会
- 國學院大學海洋信仰研究会編 1993「増補 伊豆七島出土・伝世和鏡基礎集成」『國學院大學考古学資料館紀要』第9輯 國學院大學考古学資料館
- 國學院大學學術フロンティア実行委員会編 2004「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告 平成15年度國學院大學學術フロンティア構想 國學院大學學術フロンティア実行委員会
- 国土地理院編 1995『三宅島』火山土地条件図 国土地理院
- 後藤守一・梅沢重昭 1959「Ⅲ考古 G三宅島坪田における中世遺跡の調査」『伊豆諸島文化財総合調査報告書』第一分冊 東京都文化財調査報告書6 東京都教育委員会
- 桜井徳太郎 1958「日本における民族信仰の特質－伊豆諸島の屋敷神について－」『日本人類学会 日本民族学協会連合大会』第12回記事 日本人類学会・日本民族学協会（再録：1969「伊豆諸島の屋敷神－日本民族信仰の一つの特質－」『宗教と民俗学』民俗民芸双書41 岩崎美術社）
- 笹本亀治 1976『伊ヶ谷風土記』
- 佐藤源保 1994『写真集 三宅島の神社』
- 津久井雅志・川辺慎久・新堀賢志 2005『三宅島火山地質図』火山地質図12 産業技術総合研究所地質総合調査センター
- 東京都遺跡地図作成調査委員会編 1996『東京都遺跡地図』 東京都教育委員会
- 東京都遺跡地図作成調査会編 1988『東京都遺跡地図』 東京都教育委員会
- 東京都遺跡分布調査会編 1974『東京都遺跡地図』 東京都教育委員会
- 中沢厚 1981『つぶて』ものと人間の文化史44 法政大学出版局
- 永峯光一・青木豊・内川隆志編 1994『伊豆利島 堂ノ山神社境内祭祀遺跡』 利島村教育委員会
- 橋口尚武編 1975『三宅島の埋蔵文化財』伊豆諸島の考古学的研究Ⅰ 伊豆諸島考古学研究会
- 廣瀬進吾 1987『三宅島史考』
- 松原典明 1994「礫石経研究序説」『考古学論究』第3号 立正大学考古学会
- 三橋健 1978「三嶋大明神縁起」『國學院大學紀要』第16号 國學院大學
- 三橋健 1981「佐伎多麻比咩命神社」『式内社調査報告』10 式内社研究会
- 三宅島史編纂委員会編 1982『三宅島史』 三宅村役場
- 三宅御蔵文化財総合調査団編 1958『伊豆諸島文化財総合調査報告書』第一分冊 東京都文化財調査報告書6 東京都教育委員会
- 三宅御蔵文化財総合調査団編 1965『伊豆諸島文化財総合調査報告書』第五分冊 東京都文化財調査報告書16 東京都教育委員会
- 三宅村教育委員会編 2008『三宅島郷土資料館』（パンフレット） 三宅島郷土資料館
- 宮崎務 1984「歴史時代における三宅島噴火の特徴」『火山』第2集第29巻 日本火山学会
- 宮崎博・長峯光一・小田静夫編 1973「東京都島嶼部における遺跡調査」『文化財の保護』第5号 東京都教育委員会
- 明治大学考古学博物館編 1988『鏡』明治大学考古学博物館藏品図録1 明治大学考古学博物館
- 森谷ひろみ 1974「三宅島式内社に関する歴史地理学的研究－第二報『三宅記』に載る「八王子」の神社について－」『千葉大学教養部研究報告』A-7 千葉大学教養部
- 吉田恵二編 1982『東京都三宅村坪田 中郷遺跡』國學院大學考古学実習報告第4集 國學院大學考古学研究室
- 吉田恵二編 1983～2001『東京都三宅村伊豆 物見処遺跡』國學院大學文学部考古学実習報告第6集～第35集 國學院大學考古学研究室
- 吉田恵二 1984「中世の伊豆諸島遺跡」『文化財の保護』第16号 東京都教育委員会

第1表 三宅島の積石遺構と和鏡出土・伝世地(1)

伊豆地区

橋口報告No. (橋口1975)	都遺跡地図No. (東京都教育委員会1996)	種別	名称	所在地	性格
—	3	個別	草木積石遺構	三宅村伊豆草木	積石塚
15	9	集合	物見処遺跡 積石遺構群	三宅村伊豆西原	積石塚群・礫石経塚群・石塔
	9-1	個別	1号積石遺構	三宅村伊豆西原	積石塚・礫石経塚
	欠番	—	(4号積石遺構切通し排土礫)	—	—
	欠番	—	(4号積石遺構切通し断面礫)	—	—
	9-4	個別	4号積石遺構	三宅村伊豆西原	積石塚・礫石経塚
	9-5	個別	5号積石遺構	三宅村伊豆西原	積石塚・礫石経塚
	9-6	個別	6号積石遺構	三宅村伊豆西原	積石塚・礫石経塚
	9-7	個別	7号積石遺構	三宅村伊豆西原	積石塚
	9-8	個別	8号積石遺構	三宅村伊豆西原	積石塚
27	22	集合	「カムロの塚」積石遺構群	三宅村伊豆	積石塚群
	22-1	個別	1号積石遺構 ＜国大83'27-2号＞	三宅村伊豆	積石塚
	22-2	個別	2号積石遺構 ＜国大83'27-1号＞	三宅村伊豆	積石塚
	22-3	個別	3号積石遺構 ＜国大83'27-3号＞	三宅村伊豆	積石塚
46	23	集合	「腰元の塚」積石遺構群	三宅村伊豆	積石塚
	23-1	個別	1号積石遺構 ＜国大83'46-5号＞	三宅村伊豆	積石塚
	23-2	個別	2号積石遺構 ＜国大83'46-6号＞	三宅村伊豆	積石塚
25	24	個別	伊豆土屋家屋敷神	三宅村伊豆 (土屋氏宅内)	和鏡伝世地
24	25	個別	伊豆七人山積石遺構	三宅村伊豆	積石塚
45	26	個別	神沢神社・宝山遺跡	三宅村伊豆	和鏡出土地・和鏡伝世地
21	27	個別	尾いずみ積石遺構	三宅村伊豆尾泉	積石塚
20	28	集合	尾泉遺跡 積石遺構群	三宅村伊豆尾泉	積石塚
	28-1	個別	1号積石遺構 ＜国大83'20-11号＞	三宅村伊豆尾泉	積石塚
	28-2	個別	2号積石遺構 ＜国大83'20-12号＞	三宅村伊豆尾泉	積石塚
	28-3	個別	3号積石遺構 ＜国大83'20-13号＞	三宅村伊豆尾泉	積石塚
	28-4	個別	4号積石遺構 ＜国大83'20-14号＞	三宅村伊豆尾泉	積石塚
	28-5	個別	5号積石遺構 ＜国大83'20-15号＞	三宅村伊豆尾泉	積石塚
26	45	個別	「落人姫」積石遺構	三宅村伊豆メフカリ	積石塚群
22	48	集合	尾イズミ積石遺構群	三宅村伊豆尾泉	積石塚群
	48-1	個別	1号積石遺構 ＜国大83'22-8号＞	三宅村伊豆尾泉	積石塚
	48-2	個別	2号積石遺構 ＜国大83'22-9号＞	三宅村伊豆尾泉	積石塚
	48-3	個別	3号積石遺構 ＜国大83'22-10号＞	三宅村伊豆尾泉	積石塚
49	49	個別	姉川神社	三宅村伊豆	和鏡出土地
—	52	個別	「備後様」積石遺構(湮滅)	三宅村伊豆	積石塚
—	53	個別	薬師堂境内積石遺構	三宅村伊豆	積石塚

時代	遺構	遺物	主要文献・備考
中世	積石遺構1基:礫の性状不明 径8m前後	なし	東京都遺跡分布調査会編1974 宮崎・永峯・小田1973
中世 近世	積石遺構5基(うち礫石経塚4基) 集石遺構1基 石塔1基	以下参照	橋口編1975 吉田編1983~2001
中世	方形積石遺構:円礫主体・基壇部円礫 長軸約6.30mX短軸約5.50m 高さ約1.25m	墨書礫492点(三宅村教委蔵) 銭貨6点(三宅村教委蔵) 陶器1点(三宅村教委蔵) 石器2点(三宅村教委蔵)	同上
—	—	—	—
中世	方形積石遺構(切通しにより一部破壊):円礫主体・基壇部角礫 長軸約6.80mX短軸約6.60m 高さ約1.70m	墨書礫11点(三宅村教委蔵) 陶器1点(三宅村教委蔵) 磁器2点(三宅村教委蔵) 鉄製品1点(三宅村教委蔵)	同上
中世	方形積石遺構:円礫主体 長軸約9.50mX短軸約8.00m 高さ約1.40m	墨書礫8点(三宅村教委蔵)	同上
中世	方形積石遺構(切土により一部破壊):円礫主体 長軸約8.00mX短軸約7.60m 高さ約1.3m	墨書礫3点(三宅村教委蔵) 磁器2点(三宅村教委蔵) 石器1点(三宅村教委蔵)	同上
中世	方形積石遺構(都道により一部破壊):円礫主体 長軸5.90mX短軸5.20m 高さ約1.5m	なし	同上
中世	集石遺構:円礫主体 長径3.80mX短径2.20m	なし	同上
中世	積石遺構2基 集石遺構1基	以下参照	橋口編1975 吉田編1983・1984 池田1983
中世	積石遺構(道により一部破壊):円礫主体 長径約3.00mX短径約3.00m 高さ約0.80m	なし	同上
中世	積石遺構:円礫主体 長径約2.80mX短径約1.60m 高さ約0.80m	なし	同上
中世	集石遺構:円礫主体 規模不明	なし	同上
中世	積石遺構2基~3基	以下参照	橋口編1975 吉田編1983・1984 池田1983
中世	積石遺構:円礫主体・角礫若干 長径約2.10mX短径約1.90m 高さ約0.80m	鉄片1点(三宅村教委蔵) サンゴ1点(現地)	同上
中世	積石遺構:円礫主体・角礫若干 長径約2.50mX短径約2.30m 高さ約0.80m	鉄片(三宅村教委蔵)	同上
中世	屋敷神	和鏡5面(土屋氏蔵)	橋口編1975 國學院大學海洋信仰研究会編1993
中世 近世	積石遺構1基:角礫主体 長径約2.40mX約1.70m 木根による破壊のため高さ不明	柄鏡1面(下原莊・佐藤氏蔵)	橋口編1975
中世	不明	和鏡33面(島沢氏蔵) 明治初年までは83面存在	橋口編1975
中世	積石遺構1基:角礫主体 長径約3.0mX短径約2.0m 高さ約0.90m	なし	橋口編1975 吉田編1983・1984
中世	積石遺構2基 集石遺構3基	以下参照	橋口編1975 吉田編1983・1984
中世	集石遺構:角礫主体・円礫若干 長径約1.00mX短径約1.40m	なし	同上
中世	集石遺構:角礫主体・円礫若干 長径約1.00mX短径約2.00m	なし	同上
中世	積石遺構:角礫主体 長径約1.50mX短径約1.30m 高さ約0.5m	なし	同上
中世	積石遺構:角礫主体 長径約1.10mX短径約0.90m 高さ約0.4m	なし	同上
中世	集石遺構?:角礫散乱 規模不明	なし	同上
中世	積石遺構(道により一部破壊):円礫主体 長径4.5mX短径2.3m 高さ約0.70m	なし	橋口編1976 吉田編1983・1984 池田1983
中世	積石遺構1基 集石遺構2基	以下参照	橋口編1976 吉田編1983・1984 池田1983
中世	積石遺構:角礫主体・裾部列石角礫 長径約3.40mX短径約1.20m 高さ約0.6m	なし	同上
中世	集石遺構:角礫主体・裾部列石角礫 長径約6.60mX短径約5.50mのマウンド上1ヶ所	なし	同上
中世	集石遺構:角礫主体 長径約6.00mX短径約3.50mのマウンド上2ヶ所	なし	同上
中世	不明(祠裏側・清掃中の発見)	和鏡1面(島沢氏蔵)	橋口編1976
中世	積石遺構:礫の性状不明 規模不明	なし	池田1983 佐藤1994
中世	集石遺構:円礫主体 長径約1.10mX短径約0.80m	なし	吉田編1982 *新規確認

第2表 三宅島の積石遺構と和鏡出土・伝世地（2）

神着地区

橋口報告No. (橋口1975)	都遺跡地図No. (東京都教育委員会1996)	種別	名称	所在地	性格
40	41	集合	釜の尻積石遺構群	三宅村神着	積石塚群
	41-1	個別	1号積石遺構	三宅村神着	積石塚
	41-2	個別	2号積石遺構	三宅村神着	積石塚
33	44	集合	春家積石遺構群	三宅村神着	積石塚群
	44-1	個別	1号積石遺構	三宅村神着	積石塚
	44-2	個別	2号積石遺構	三宅村神着	積石塚
34	51	個別	春家北積石遺構 <橋口75' 春家第2積石遺構>	三宅村神着	積石塚
—	64	個別	御笏神社	三宅村神着	和鏡出土地・和鏡伝世地

坪田地区

橋口報告No. (橋口1975)	都遺跡地図No. (東京都教育委員会1996)	種別	名称	所在地	性格
6	12	集合	中郷遺跡 積石遺構西群	三宅村坪田中郷	積石塚群
	12-1	個別	1号積石遺構 <都58' 1号/国大89' 5号>	三宅村坪田中郷	積石塚・和鏡出土地
	12-2	個別	2号積石遺構(湮滅) <都58' 2号>	三宅村坪田中郷	積石塚
	12-3	個別	3号積石遺構 <都58' 3号/国大89' 6号>	三宅村坪田中郷	積石塚
	12-4	個別	4号積石遺構 <都58' 4号>	三宅村坪田中郷	積石塚
	12-5	個別	5号積石遺構 <都58' 5号>	三宅村坪田中郷	積石塚
	12-6	個別	6号積石遺構 <都58' 6号>	三宅村坪田中郷	積石塚
	12-7	個別	7号積石遺構 <都58' 7号>	三宅村坪田中郷	積石塚
	12-8	個別	8号積石遺構 <国大89' 1号>	三宅村坪田中郷	積石塚
	12-9	個別	9号積石遺構 <国大89' 2号>	三宅村坪田中郷	積石塚
	12-10	個別	10号積石遺構 <国大89' -3号>	三宅村坪田中郷	積石塚
	12-11	個別	11号積石遺構 <国大89' -4号>	三宅村坪田中郷	積石塚
	12-12	個別	12号積石遺構	三宅村坪田中郷	積石塚
7	34	個別	坪田田中家屋敷神	三宅村坪田 (田中氏宅内)	積石塚・和鏡出土地
9	35	個別	上原遺跡	三宅村坪田	和鏡出土地
5	36	個別	旧坪田松村家屋敷神(湮滅) <坪田桑原氏宅積石遺構・中郷B遺跡>	三宅村坪田 (桑原氏宅内)	積石塚・和鏡出土地
4	37	個別	坪田筑波家屋敷神	三宅村坪田 (筑波氏宅内)	和鏡出土地
2	38	集合	大長井積石塚群(湮滅)	三宅村坪田 (筑波製材所内)	積石塚群・石塔
	38-1	個別	1号積石遺構	三宅村坪田	積石塚・和鏡出土地
	38-2	個別	2号積石遺構	三宅村坪田	積石塚
42	40	個別	お長井積石遺構	三宅村坪田	積石塚
51	54	個別	カドノブラ遺跡・法華供養塔	三宅村坪田	礫石経塚・石塔
—	56	個別	魔王神社旧社地	三宅村坪田	和鏡出土地
—	57	個別	大般若供養塔・道の沢経塚(湮滅)	三宅村坪田	礫石経塚・石塔
—	58	集合	中郷遺跡 積石遺構東群	三宅村坪田中郷	積石塚群
	58-1	個別	1号積石遺構	三宅村坪田中郷	積石塚
	58-2	個別	2号積石遺構	三宅村坪田中郷	積石塚
	58-3	個別	3号積石遺構	三宅村坪田中郷	積石塚

時代	遺構	遺物	主要文献・備考
中世	積石遺構2基	以下参照	橋口編1975
中世	積石遺構(崖面露出・昭和15(1940)年火山堆積物下):円礫主体 規模不明	なし	同上
中世	積石遺構:礫の性状不明 規模不明	なし	同上
中世	積石遺構1基 集石遺構1基	以下参照	橋口編1975
中世	方形積石遺構:上面円礫集石・基壇部角礫 長軸約7.70mX短軸約7.30m 高さ約0.80m	なし	同上
中世	集石遺構:礫の性状不明 規模不明	なし	同上
中世	積石遺構:円礫主体 径1.5m前後	なし	橋口編1975
中世	不明(社叢・明治16(1883)年の出土記録あり)	和鏡(御笏神社蔵)	橋口編1975 國學院大學海洋信仰研究会編1993

時代	遺構	遺物	主要文献・備考
中世	積石遺構5基 集石遺構7基	以下参照	三宅御蔵文化財総合調査団編1958 吉田編1989
中世	積石遺構:円礫・角礫 径2m前後 高さ1m前後	和鏡?面(二宮神社蔵?)	同上
中世	積石遺構(道により破壊):礫の性状不明 径2m前後 高さ1m前後	和鏡?面(二宮神社蔵?)	同上
中世	積石遺構:円礫主体・角礫若干 長径約2.40mX短径約2.20m 高さ約0.80m	和鏡1面(明治大学博物館蔵) 提子注口1点 陶器3+点 磁器3点	同上 明大考古博1988 國學院大學海洋信仰研究会編1993 *和鏡所在確認
中世	集石遺構(下部に土坑あり):円礫主体・角礫若干 径1m前後	陶器?点	同上
中世	集石遺構:礫の性状不明 径1m前後	なし	同上
中世	集石遺構:礫の性状不明 径1m前後	なし	同上
中世	集石遺構:礫の性状不明 径1m前後	なし	同上
中世	積石遺構:円礫・角礫 長径約1.60mX短径約1.50m	陶器1+点(三宅村教委蔵)	同上
中世	積石遺構:円礫主体 長径約2.00mX短径約1.60m	陶器?点(三宅村教委蔵) 鉄製品1点(三宅村教委蔵)	同上
中世	集石遺構:円礫主体 長径約0.90mX短径約0.60m	なし	同上
中世	集石遺構:円礫主体 円礫10数個	陶器3+点(三宅村教委蔵)	同上
中世	集石遺構:円礫主体 長径約1.40mX短径約1.00m	なし	*新規確認
中世	集石遺構1基:円礫主体 長径約2.1mX短径約1.8m	和鏡1面(田中氏蔵)	三宅御蔵文化財総合調査団編1958 橋口編1975 宮崎・永峯・小田1973
中世	不明(村道工事による発見)	和鏡1面(松村氏蔵)	橋口編1975 國學院大學海洋信仰研究会編1993
中世	積石遺構:円礫主体 径1.5m前後	和鏡2面(村松氏蔵) 和鏡1面(桑原氏蔵)	三宅御蔵文化財総合調査団編1958 橋口編1975 國學院大學海洋信仰研究会編1993 青木・内川編1994
中世	屋敷神(偶然の発見)	和鏡1面(筑波氏蔵)	橋口編1975 國學院大學海洋信仰研究会編1993
中世	積石遺構2基~3基	宝篋印塔1基(海蔵寺蔵)ほか 以下参照	橋口編1975
中世	積石遺構:円礫主体 規模不明	和鏡1面(筑波氏蔵)	同上 國學院大學海洋信仰研究会編1993
中世	積石遺構:円礫主体 規模不明	なし	同上
中世	大型積石遺構:礫の性状不明 径4m前後	なし	橋口編1975
近世 享和2(1802)年	礫石経塚1基:円礫主体 長軸約1.20mX短軸約1.00mの土坑に経石充填 石塔1基	礫石経10,000点以上(現地)	橋口編1975
中世	不明(二宮神社への合祀時に常滑甕から出土)	和鏡10数面(二宮神社蔵) 陶器1点(二宮神社蔵)	浅沼1973 橋口編1975 國學院大學海洋信仰研究会編1993
近世	石塔1基(No54と対の石塔)	礫石経	橋口編1975
中世	積石遺構2基 集石遺構1基	以下参照	吉田編1982・1989
中世	積石遺構:円礫主体 長径約3.50mX短径約2.00m 高さ約0.40m	陶器1点(三宅村教委蔵) ガラス片1点(三宅村教委蔵) サンゴ5点(三宅村教委蔵)	同上
中世	集石遺構(下部に土坑あり):円礫主体・角礫若干 径約1.40m	鉄製品1点(三宅村教委蔵) サンゴ1点(三宅村教委蔵) 魚骨2点(三宅村教委蔵) 貝殻3点(三宅村教委蔵)	同上
中世	積石遺構:円礫主体・角礫若干 長径1.60mX短径1.40m 高さ約0.75m~0.45m	サンゴ2点(現地) 貝殻片若干(三宅村教委蔵)	同上

第3表 三宅島の積石遺構と和鏡出土・伝世地（3）

神着地区

橋口報告No. (橋口1975)	都遺跡地図No. (東京都教育委員会1996)	種別	名称	所在地	性格
—	59	集合	坪田七人山積石遺構群	三宅村坪田	積石塚群
	59-1	個別	1号積石遺構	三宅村坪田	積石塚
	59-2	個別	2号積石遺構	三宅村坪田	積石塚
	59-3	個別	3号積石遺構	三宅村坪田	積石塚
	59-4	個別	4号積石遺構	三宅村坪田	積石塚
	59-5	個別	5号積石遺構	三宅村坪田	積石塚
	59-6	個別	6号積石遺構	三宅村坪田	積石塚
	59-7	個別	7号積石遺構	三宅村坪田	積石塚
—	60	集合	大里遺跡 積石遺構東群	三宅村坪田大長井	積石塚群
	60-1	個別	1号積石遺構	三宅村坪田大長井	積石塚
	60-2	個別	2号積石遺構	三宅村坪田大長井	積石塚
—	61	集合	大里遺跡 積石遺構西群	三宅村坪田大長井	積石塚群
	61-1	個別	1号積石遺構	三宅村坪田大長井	積石塚
	61-2	個別	2号積石遺構	三宅村坪田大長井	積石塚
	61-3	個別	3号積石遺構	三宅村坪田大長井	積石塚
	61-4	個別	4号積石遺構	三宅村坪田大長井	積石塚

阿古地区

橋口報告No. (橋口1975)	都遺跡地図No. (東京都教育委員会1996)	種別	名称	所在地	性格
50	50	個別	八十司神社	三宅村阿古	和鏡伝世地
—	62	個別	西之御門積石遺構	三宅村阿古富賀浜	積石塚
—	63	個別	富賀神社	三宅村阿古富賀山	和鏡伝世地

伊ヶ谷地区

橋口報告No. (橋口1975)	都遺跡地図No. (東京都教育委員会1996)	種別	名称	所在地	性格
—	65	個別	后神社	三宅村伊ヶ谷	和鏡伝世地

時代	遺構	遺物	主要文献・備考
中世 近世	集石遺構7基 墓碑7基	以下参照	吉田編1984
中世 近世	集石遺構:角礫主体 長径約2.80mX短径約0.90m	なし	同上
中世 近世	集石遺構:角礫主体 長径約1.50mX短径約1.30m	なし	同上
中世 近世	集石遺構:角礫主体 長径約1.70mX短径約1.00m	なし	同上
中世 近世	集石遺構:角礫主体 長径約1.20mX短径約1.00m	サンゴ1点(現地)	同上
中世 近世	集石遺構:角礫主体 長径約1.50mX短径約1.00m	サンゴ1点(現地)	同上
中世 近世	集石遺構:角礫主体 長径約0.70mX短径約0.50m	なし	同上
中世 近世	集石遺構:角礫主体 長径約1.40mX短径約1.20m	なし	同上
中世	集石遺構2基	以下参照	青木・内川・山本・金成1998
中世	集石遺構:角礫・円礫 長径約1.40mX短径約1.00m	なし	同上
中世	集石遺構:角礫・円礫 長径約1.20m～短径約1.30m	なし	同上
中世	積石遺構4基	以下参照	青木・内川・山本・金成1998
中世	積石遺構:角礫・円礫 長径約1.00mX短径約0.80m	なし	同上
中世	積石遺構:角礫・円礫 長径約1.50mX短径約0.90m	なし	同上
中世	積石遺構:角礫・円礫 径約1.30m	なし	同上
中世	積石遺構:角礫・円礫 長径約1.50mX短径約1.30m	なし	同上

時代	遺構	遺物	主要文献・備考
中世	神社	和鏡1面(三宅村教委蔵)	浅沼1973 橋口編1975
中世	集石遺構1基:円礫主体 長径約5.50mX短径約2.60m	なし	*新規確認
中世	神社	和鏡?面(御笏神社蔵)	三宅御蔵文化財総合調査団編1958 橋口編1975

時代	遺構	遺物	主要文献・備考
中世	神社	和鏡1面(后神社蔵)	三宅御蔵文化財総合調査団編1958 橋口編1975 國學院大學海洋信仰研究会編1993

図版 1



1. 物見処遺跡 1号積石遺構



2. 物見処遺跡 4号積石遺構



3. 物見処遺跡 5号積石遺構



4. 物見処遺跡 6号積石遺構



5. 神沢神社・宝山遺跡



6. 薬師堂境内積石遺構



7. 尾いずみ積石遺構



8. 伊豆七人山積石遺構



9. 「落人姫」積石遺構



10. 「腰元の塚」1号積石遺構



11. 「腰元の塚」2号積石遺構



12. 「カム口の塚」1号積石遺構



13. 「カム口の塚」2号積石遺構



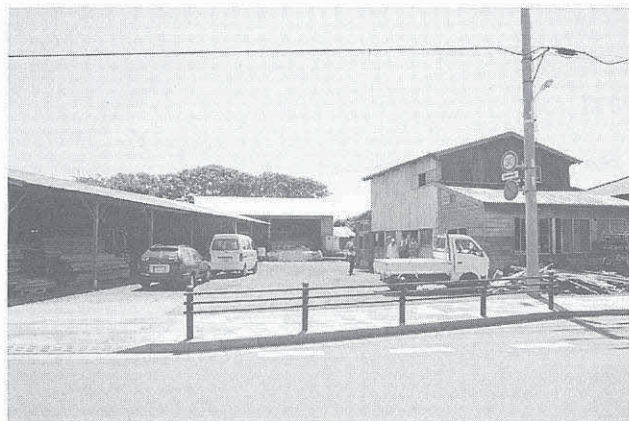
14. 「カム口の塚」3号積石遺構



15. 姉川神社



16. 春家積石遺構群 1号積石遺構



17. 大長井積石遺構群（湮滅）



18. 中郷遺跡 東群3号積石遺構



19. 中郷遺跡 西群3号積石遺構



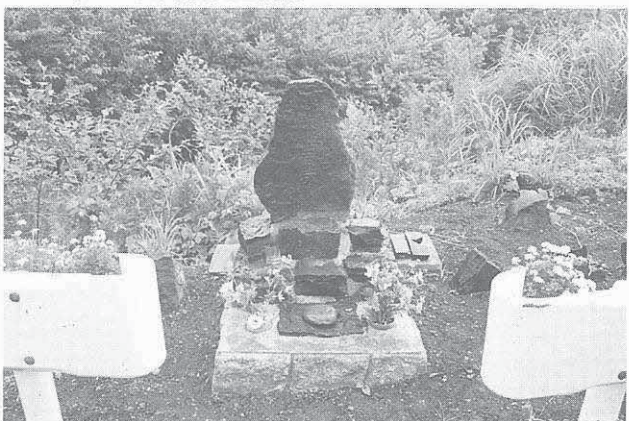
20. 中郷遺跡 西群12号積石遺構



21. 坪田七人山積石遺構群



22. 魔王神社旧社地



23. 大般若供養塔・道の沢経塚（湮滅）



24. 西之御門積石遺構

資料編 三宅島の和鏡

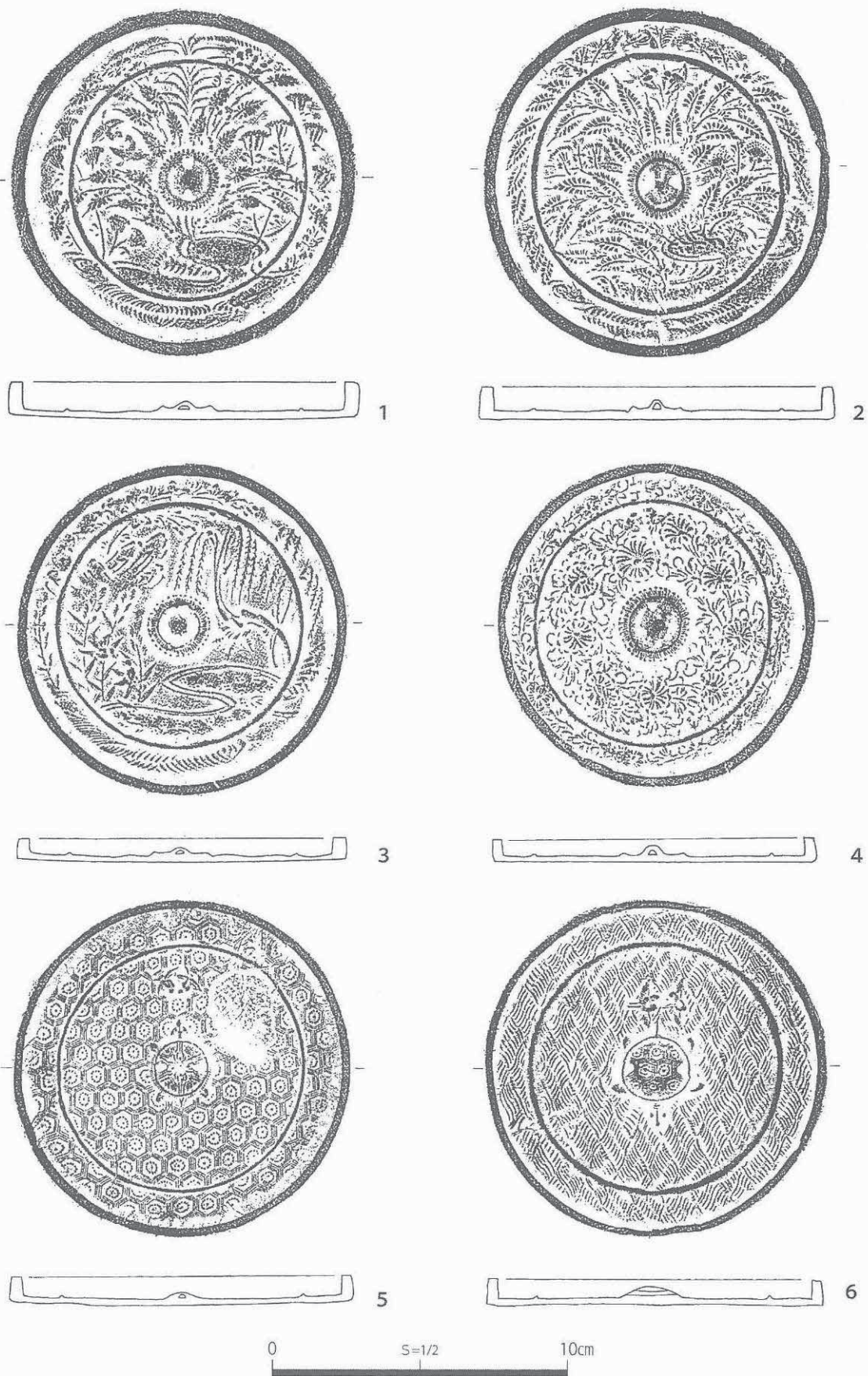
三宅島に和鏡が多数存在する事実については、家々に祭られる屋敷神や島内各所に点在する神社の奉納例、昭和31(1956)年に東京都教育委員会が実施した三宅御蔵文化財総合調査による「坪田3号積石遺構」(後藤・梅沢1958)の検出例などが、早くから研究者の中で強く認識されてきた。これらの和鏡について悉皆的な資料化を実施したのは、三宅高校教諭であった橋口尚武氏を中心とする伊豆諸島考古学研究会である(橋口1975)。これら昭和30年代から続く基礎的研究を受けて、國學院大學海洋信仰研究会(永峯光一・青木豊・川崎義雄・内川隆志)は、文部省科学研究費総合研究A「海洋信仰の研究」(代表:永峯光一)を立案し、三宅島に限らず伊豆諸島全域に偏在する和鏡に着目して総合調査に発展させ、集成研究を実施した経緯がある。同研究会の調査では、平成3年(1991)8月から12月にかけて伊豆諸島に所在する島々の内、大島・利島・新島・式根島・三宅島・八丈島・八丈小島の出土・伝世和鏡について悉皆調査を実施した(國學院大學海洋信仰研究会編1993)。その際、八丈小島に所在する鳥打遺跡・宇津木遺跡において近世の祭祀遺跡の調査を実施したところ、特殊な石組みの小祠を主体とする祭祀遺構と多数の陶磁器・柄鏡・鉄製祭具などが検出されて注目を集めた。さらに平成4年(1992)には、御蔵島における悉皆調査と、利島堂ノ山神社境内祭祀遺跡の発掘調査を実施し、和鏡をはじめとした12世紀後半に遡る多数の遺物を検出したのである。また、平成10(1998)年から平成15年(2003)にかけて断続的に調査した利島阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡は、12世紀後半から17世紀初頭まで続く大規模な祭祀遺跡であることが明らかとなり、石製の小祠の周辺に奉賽された33面にも及ぶ和鏡が検出された。

三宅島における和鏡の出土状況については、既に具体的に第4章で詳述しており、ここでは島内で確認されている和鏡の概要について述べておく。最も数の多い神社奉納鏡は、御笏神社・后神社・二宮神社・神沢神社・姉川神社・八十司神社の6社に所在する。神着の御笏神社奉納鏡[資料編鏡No.1~No.11]は、阿古の富賀神社から移されたものとも言われ、現在確認できる11面は、概ね13世紀前半から14世紀前半にかけての和鏡が主体を占める。伊ヶ谷の後神社に保管される和鏡は、14世紀に比定される菊花双雀鏡[資料編鏡No.12]1面である。坪田地区の二宮神社には総数18面の和鏡[資料編鏡No.13~No.30]が保管されているが、明治23年(1890)前後に魔王神社旧社地より常滑甕と共に掘り出されたものと、坪田地区に点在する積石から出土したとされるものが混在している。そのうち7面は、12世紀後半に比定される[資料編鏡No.13~No.19]。伊豆地区の神沢神社には、神社に伝世したものと昭和初期に神社裏の宝山から掘出されたものを併せた33面の和鏡[資料編鏡No.31~No.63]が伝世する。また、姉川神社には神社裏から出土したとされる和鏡[資料編鏡No.64]が伝わる。同じく伊豆地区の薬師堂所蔵とされる洲浜桜樹双雀鏡[資料編鏡No.66]は、本学所蔵大場磐雄博士資料に拓本が記録されている。阿古の八十司神社では、鰐口に納められていた13世紀の菊花双雀鏡[資料編鏡No.65]が知られる。

発掘調査によって積石塚から出土した和鏡は、坪田中郷遺跡積石遺構群西群(中郷遺跡)のうち、昭和31年(1956)に後藤守一氏らが調査した3積石遺構出土鏡[資料編鏡No.67]のみであり、明治大学博物館が保管している。また、坪田の筑波製材所敷地内に所在する大長井積石遺構群では、12世紀前半から中頃まで遡る梅花双鳥鏡[資料編鏡No.74]が偶発的に発見された。

各所の屋敷神からも、多数の和鏡が発見されている。伊豆の土屋家屋敷神には、5面の和鏡[資料編鏡No.69~73]が奉納されていた。このうち梅枝鳥蝶鏡[資料編鏡No.69]は、今回の調査で初めて確認した資料である。坪田では、旧松村家屋敷神(桑原氏宅積石遺構・中郷B遺跡)の積石遺構から和鏡が発見されており、旧地主の松村氏が所蔵する2面の和鏡[資料編鏡No.76・No.77]と、後に土地を引き継いだ桑原氏発見の方鏡[資料編鏡No.78]が知られる。また同じく坪田では、田中家屋敷神の積石遺構から山吹双雀鏡[資料編鏡No.79]が見つかった。

その他に、上原遺跡出土資料[資料編鏡No.80]や、出土地不明資料[資料編鏡No.82~No.87]などが確認されている。(内川)



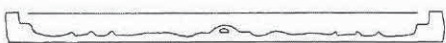
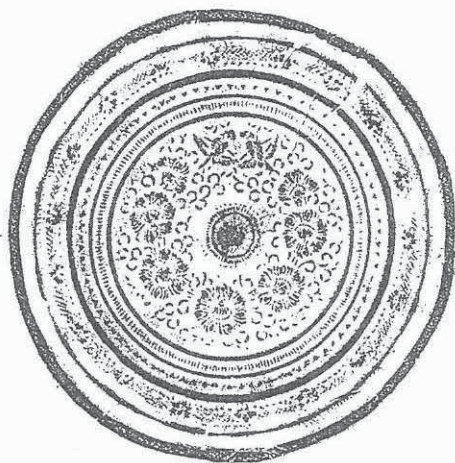
御笏神社 1 (同社蔵) 1 : 秋草双雀鏡、2 : 秋草双雀鏡、3 : 柳樹双雀鏡、4 : 牡丹双鳥鏡、5 : 亀甲菊花地文双雀鏡、
6 : 波文地双雀鏡



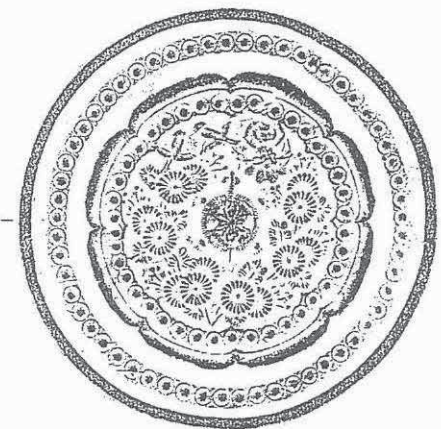
7



8



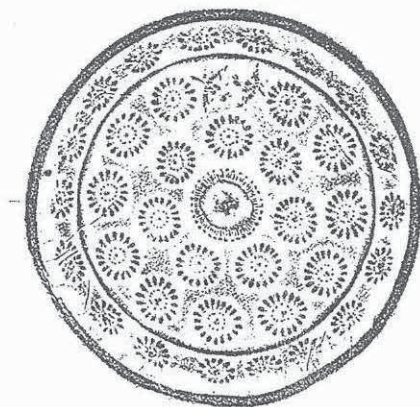
9



10



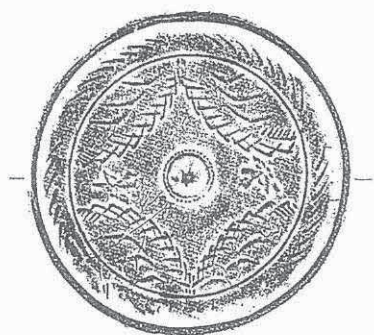
11



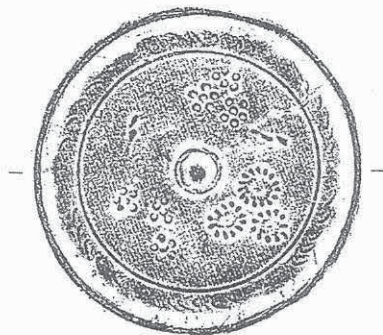
12

0 S=1/2 10cm

御笏神社2（同社蔵） 7：波文地双鳥鏡、8：宝綬鴛鴦鏡、9：牡丹散双雀鏡、10：愛染明王鏡、11：松竹遊鶴図鏡
后神社（同社蔵） 12：菊花散双雀鏡



13



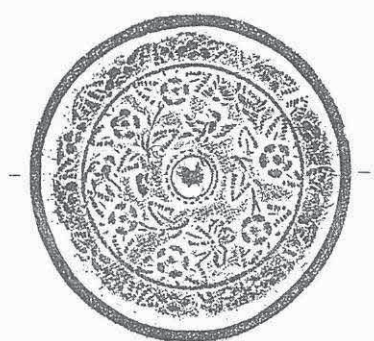
14



15



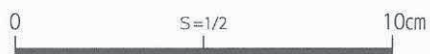
16



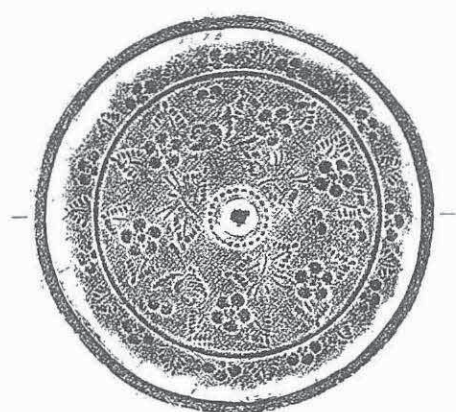
17



18



二宮神社 1 (同社蔵) 13: 蘆草双雀鏡、14: 菊・梅花散双鳥鏡、15: 籬秋草双鳥鏡、16: 撫子双雀鏡、17: 梅花散双雀鏡、
18: 桜花散双雀鏡



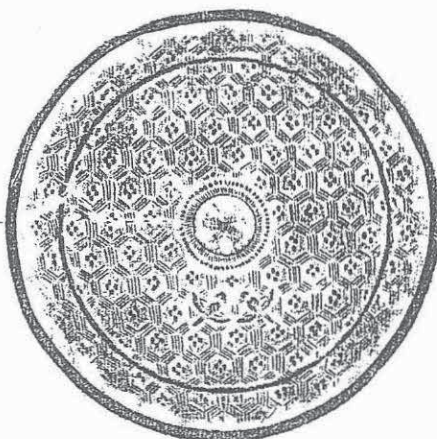
19



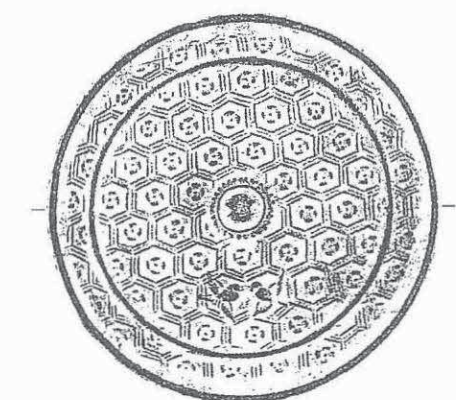
20



21



22



23



24

0 S=1/2 10cm

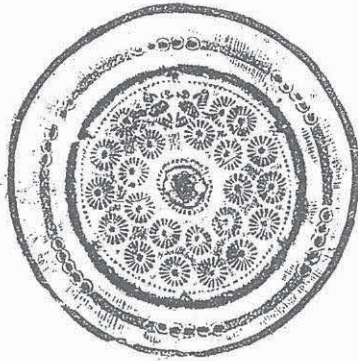
二宮神社 2 (同社蔵) 19: 梅花散双雀鏡、20: 松喰鶴鏡、21: 秋草双雀鏡、22: 亀甲地双鳥鏡、23: 亀甲地双鳥鏡、24: 三ツ盛亀甲地双鶴鏡



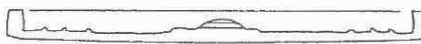
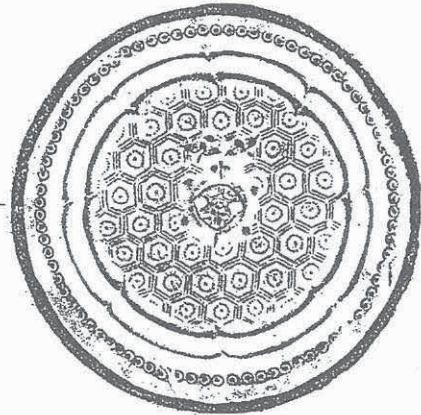
25



26



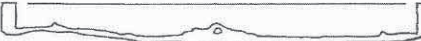
27



28



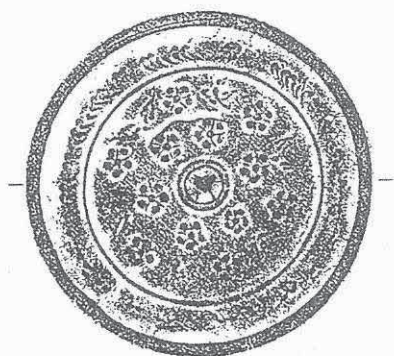
29



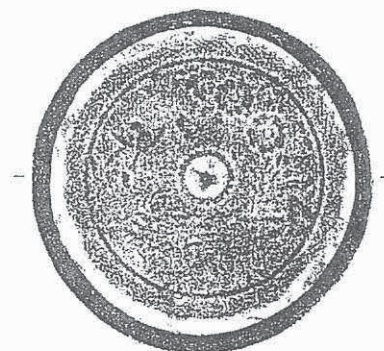
30

0 S=1/2 10cm

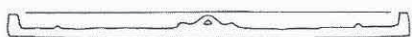
二宮神社 3 (同社蔵) 25: 蓬萊鏡、26: 愛染明王鏡、27: 菊花散双雀鏡、28: 龜甲地文双雀鏡、29: 牡丹双雀鏡、30: 松樹双雀鏡



31



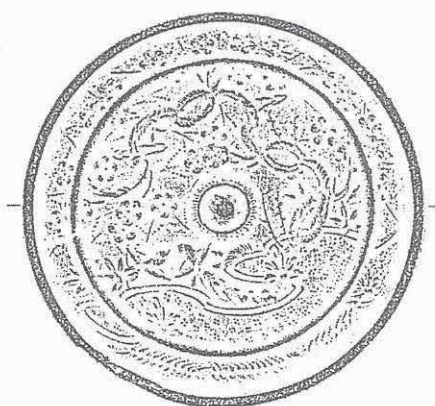
32



33



34



35



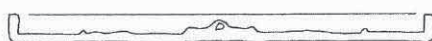
36

0 S=1/2 10cm

神沢神社 1 (同社蔵) 31: 梅花散双雀鏡、32: 梅花双雀鏡、33: 楓枝双雀鏡、34: 梅・楓枝双雀鏡、35: 梅樹双雀鏡、36: 柳樹双雀鏡



37



38



39



40



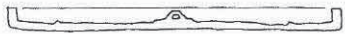
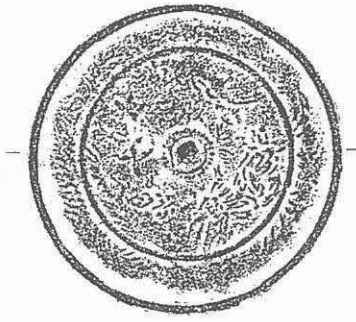
41



42

0 S=1/2 10cm

神沢神社2 (同社蔵) 37: 松樹双鳥鏡、38: 菊水双雀鏡、39: 竹垣? 菊花双雀鏡、40: 菊水双雀鏡、41: 筏流双雀鏡、
42: 菊花散双雀鏡



43



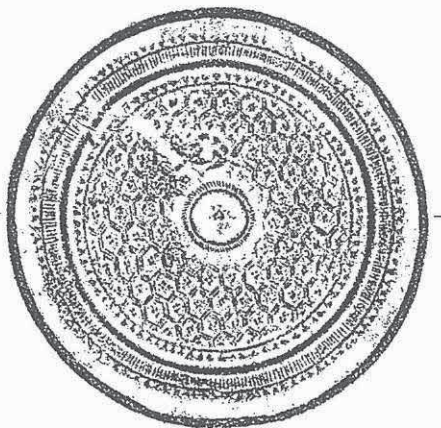
44



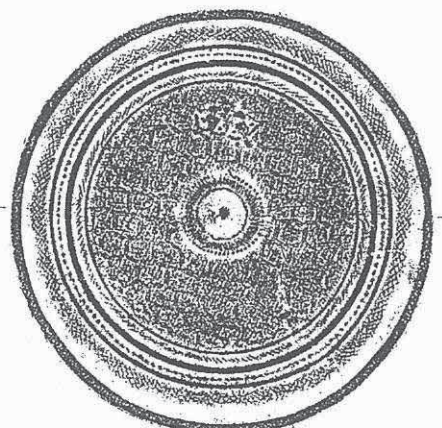
45



46



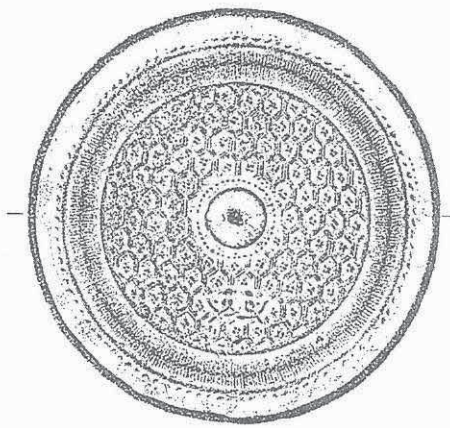
47



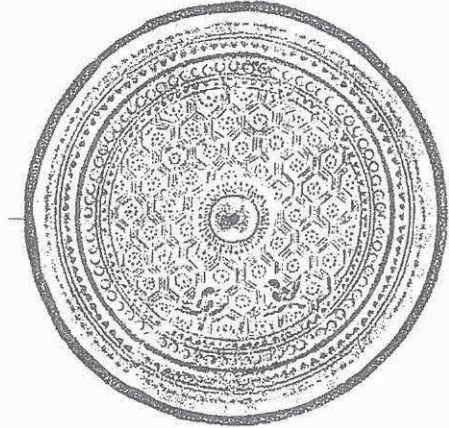
48

0 S=1/2 10cm

神沢神社 3 (同社蔵) 43: 松樹双雀鏡、44: 楓葉散双鳥鏡、45: 亀甲地双鳥鏡、46: 菊花双鳥鏡、47: 亀甲地双雀鏡、48: 亀甲地双雀鏡



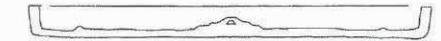
49



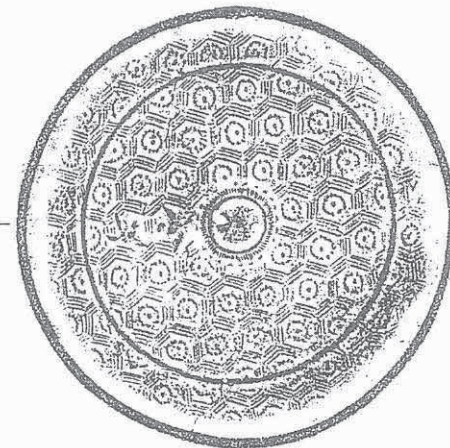
50



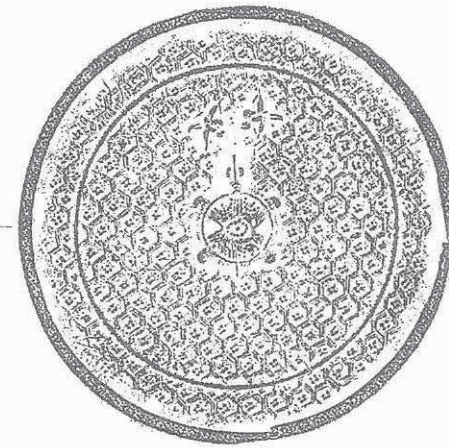
51



52



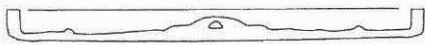
53



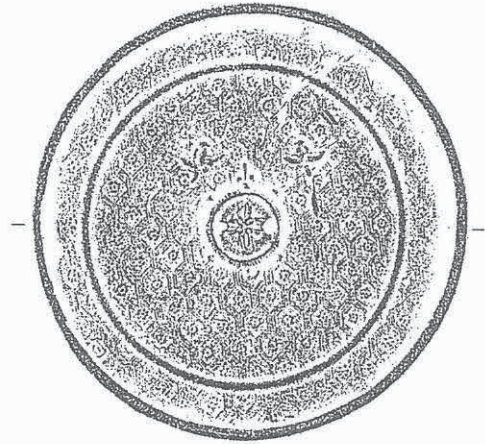
54

0 S=1/2 10cm

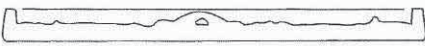
神沢神社 4 (同社蔵) 49: 亀甲地双雀鏡、50: 亀甲地双雀鏡、51: 竹垣秋草双雀鏡、52: 柳葉双雀鏡、53: 亀甲地双雀鏡、54: 亀甲地双雀鏡



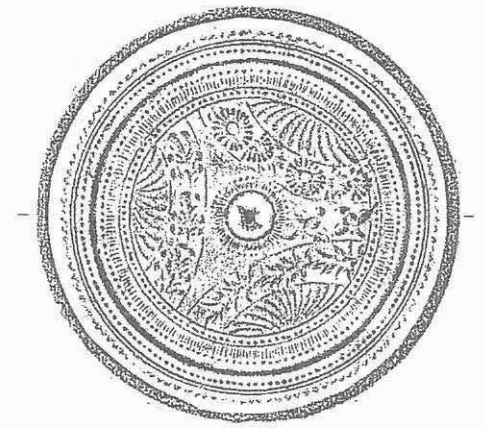
55



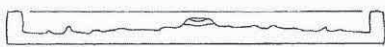
56



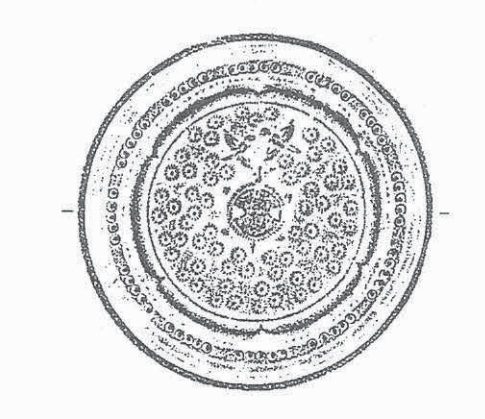
57



58



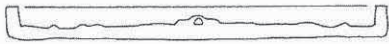
59



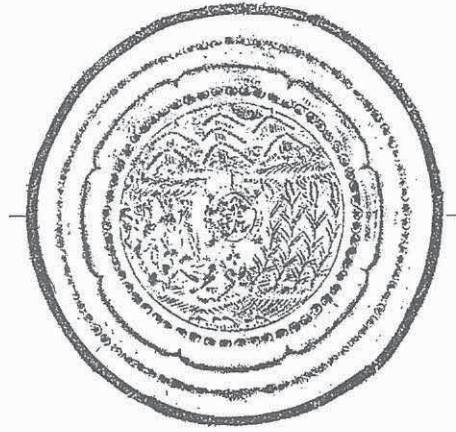
60

0 S=1/2 10cm

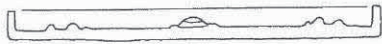
神沢神社 5 (同杜蔵) 55: 蓬萊鏡、56: 亀甲地双雀鏡、57: 愛染明王 (蓬萊?) 鏡、58: 輪連草花双雀鏡、59: 筏流双雀鏡、60: 菊花散双雀鏡



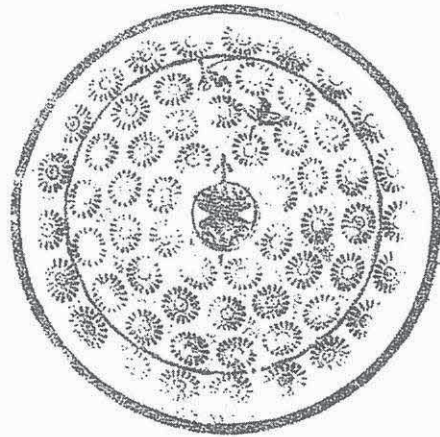
61



62



63



64



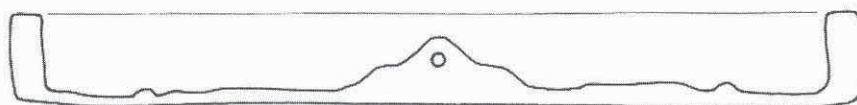
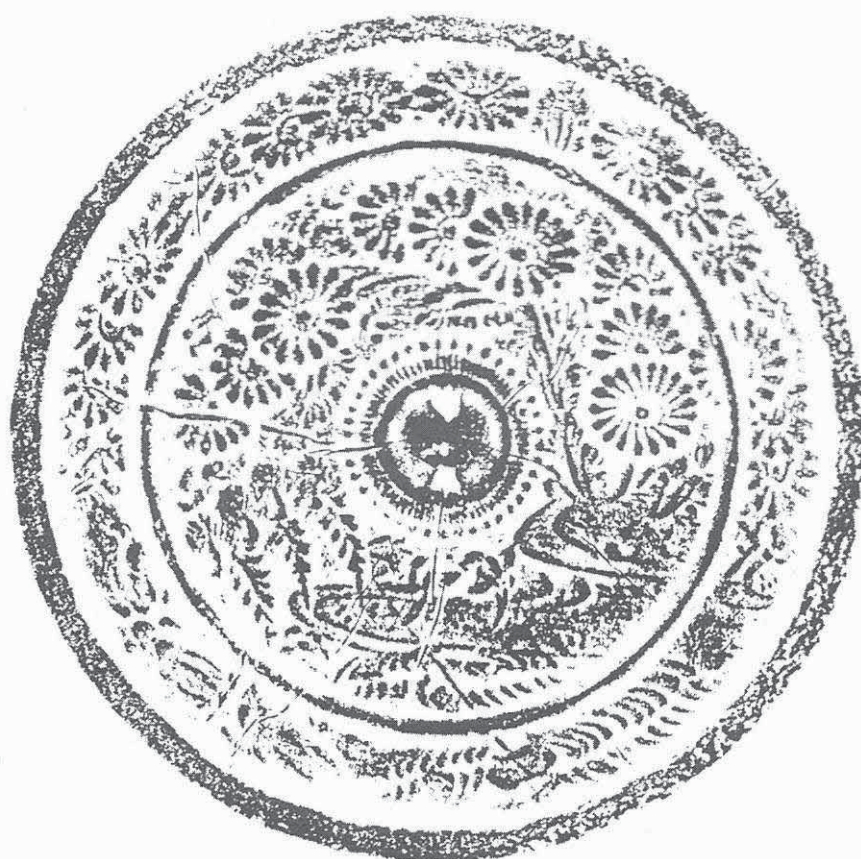
65



66

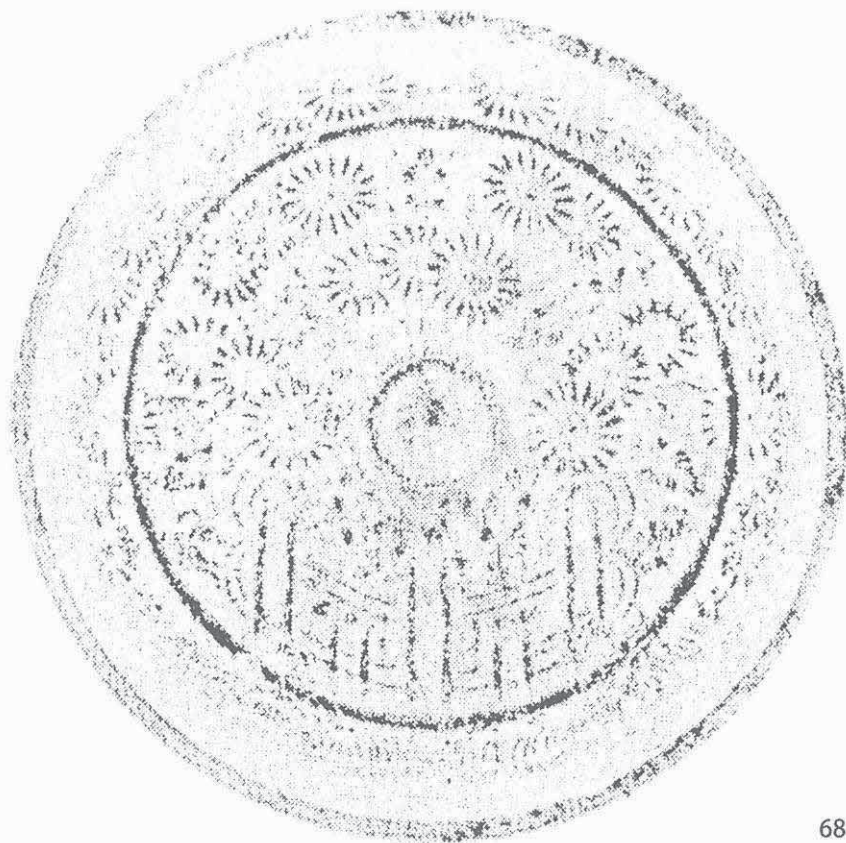
0 S=1/2 10cm

神沢神社 6 (同社蔵) 61: 松樹双雀鏡、62: 秋草双雀鏡、63: 松樹三ヶ月双雀鏡 姉川神社 (同社蔵) 64: 菊花散双雀鏡
八十司神社 (三宅村教育委員会蔵) 65: 菊花双雀鏡 薬師堂 (所蔵者不明) 66: 洲浜桜樹双雀鏡

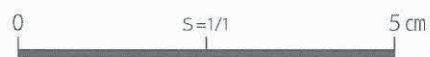


67

0 S=1/1 5 cm



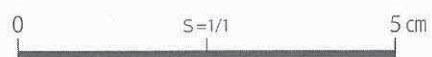
68



中郷遺跡積石遺構群西群（所蔵者不明） 68：籬菊花双雀鏡



69

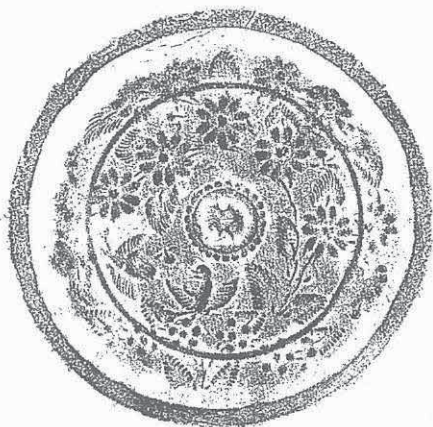




70



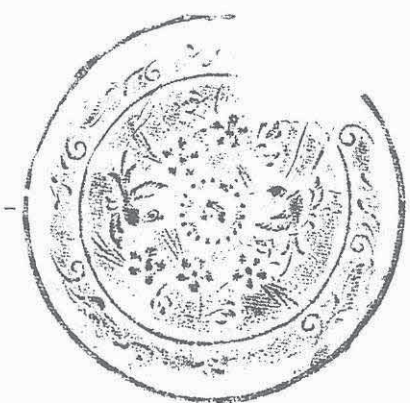
71



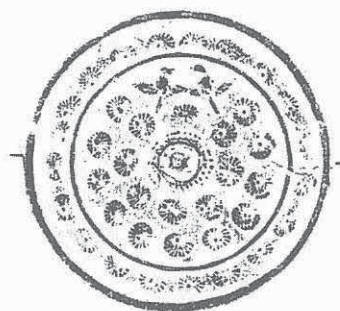
72



73



74



75

0 S=1/2 10cm

土屋家屋敷神2 (土屋氏蔵) 70: 松喰鶴鏡、71: 松喰鶴鏡、72: 桜花双雀鏡、73: 蓬萊鏡
大長井積石遺構群 (筑波氏蔵) 74: 梅花双鳥鏡 筑波家屋敷神 (筑波氏蔵) 75: 菊花散双雀鏡



76



77



78



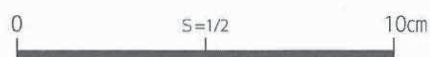
79



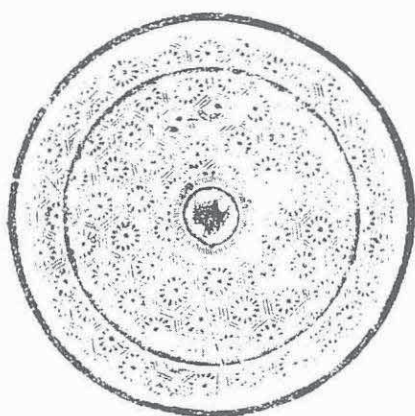
80



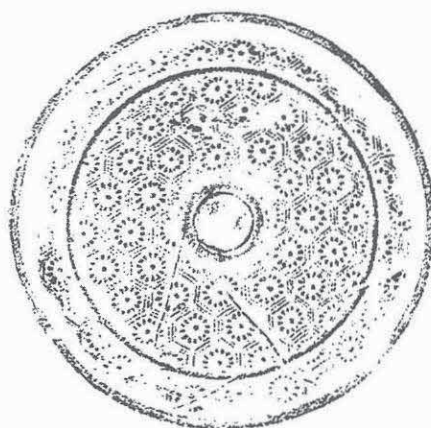
81



旧松村家屋敷神（松村氏蔵） 76：桜花双鳥鏡、77：蓬萊鏡 旧松村家屋敷神（桑原氏蔵） 78：鶴亀鏡
田中家屋敷神（田中氏蔵） 79：山吹双雀鏡 上原遺跡（松村氏蔵） 80：山吹散双雀鏡 出土地不明（田村氏蔵） 81：秋草双雀鏡



82



83



84



85



86



87



出土地不明（佐藤氏蔵） 82：亀甲地文双雀鏡、83：亀甲地文双雀鏡

出土地不明（三宅村教育委員会蔵） 84：菊花双雀鏡、85：倭舟双雀鏡

出土地不明（浅沼氏蔵） 86：亀甲地文双雀鏡、87：群鳥鏡

三宅島出土・伝世和鏡一覧(1)

No.	出土伝世地・保管者	所在地	時期	名称	縁式	鈕式	界圍	面径 (cm)	縁高 (cm)	備考
1	御笏神社	神着	鎌倉 13c 前	秋草双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.80	0.96	都文化財
2	御笏神社	神着	鎌倉 13c 前	秋草双雀鏡	内傾式厚縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	12.00	1.11	都文化財
3	御笏神社	神着	鎌倉 13c 前	柳樹双雀鏡	直角式厚縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.20	0.70	都文化財
4	御笏神社	神着	鎌倉 13c 前	牡丹双鳥鏡	内傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.10	0.78	都文化財
5	御笏神社	神着	室町 14c 前	亀甲菊花地文双雀鏡	内傾式中縁	花菱亀甲亀鈕	単圈(中)	11.60	0.79	都文化財
6	御笏神社	神着	室町 14c 前	波文地双雀鏡	内傾式中縁	菊花亀甲亀鈕	単圈(中)	11.60	0.88	都文化財
7	御笏神社	神着	室町 14c 前	波文地双鳥鏡	内傾式中縁	花菱亀甲亀鈕	単圈(中)	11.30	0.86	都文化財
8	御笏神社	神着	鎌倉 13c 前	宝篋鸞鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.70	0.74	都文化財
9	御笏神社	神着	室町 14c 前	牡丹散双雀鏡	内傾式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	11.50	0.82	都文化財
10	御笏神社	神着	室町 14c 前	愛染明王鏡	内傾式中縁	花菱亀甲亀鈕	特殊圈	11.30	0.78	都文化財
11	御笏神社	神着	鎌倉 13c 前	松竹遊鶴図鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.30	0.71	都文化財
12	后神社	伊ヶ谷	室町 14c	菊花散双雀鏡	内傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	10.70	0.81	都文化財
13	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	平安末 12c 後	蘆草双雀鏡	直角式細縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	8.40	0.47	都文化財
14	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	平安末 12c 後	菊・梅花散双鳥鏡	直角式細縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	8.40	0.47	都文化財
15	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	平安末 12c 後	籬秋草双鳥鏡	直角式厚縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	8.90	0.64	都文化財
16	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	平安末 12c 後	撫子双雀鏡	外傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	9.20	0.63	都文化財
17	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	平安末 12c 後	梅花散双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	8.70	0.64	都文化財
18	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	平安末 12c 後	桜花散双雀鏡	直角式中縁	菊花中隆鈕	単圈(細)	9.80	0.46	都文化財
19	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	平安末 12c 後	梅花散双雀鏡	内傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	10.40	0.50	都文化財
20	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	鎌倉 13c 前	松喰鶴鏡	直角式中縁	菊花中隆鈕	単圈(細)	11.60	0.66	都文化財
21	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	鎌倉 13c 前	秋草双雀鏡	内傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.30	0.95	都文化財
22	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	室町 14c 前	亀甲地双鳥鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.20	0.90	都文化財
23	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	室町 14c 前	亀甲地双鳥鏡	内傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	10.50	0.63	都文化財
24	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	室町 14c 後	三ツ盛亀甲地双鶴鏡	内傾式中縁	菊花亀甲亀鈕	単圈(中)	10.90	1.10	都文化財
25	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	室町 14c 後-15c 初	蓮葉鏡	内傾式中縁	花菱亀甲亀鈕	単圈(中)	11.20	0.67	都文化財
26	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	室町 14c 後-15c 初	愛染明王鏡	直角式中縁	菊花亀甲亀鈕	単圈(中)	11.20	0.61	都文化財
27	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	室町 14c 前	菊花散双雀鏡	直角式厚縁	花蕊鈕	特殊圈	9.90	0.80	都文化財
28	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	室町 14c 前	亀甲地文双雀鏡	内傾式中縁	菊花亀甲亀鈕	特殊圈	11.00	0.75	都文化財
29	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	室町 14c 前	牡丹双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	11.20	0.72	都文化財
30	二宮神社 (魔王神社or中郷遺跡)	坪田	室町 14c 前	松樹双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	11.40	0.81	都文化財
31	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	平安末 12c 後	梅花散双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	9.20	0.50	都文化財
32	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	平安末 12c 後	梅花双雀鏡	直角式厚縁	菊花中隆鈕	単圈(細)	9.70	0.67	都文化財
33	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 前	楓枝双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	10.60	0.61	都文化財
34	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	平安末 12c 後	梅・楓枝双雀鏡	直角式中縁	菊花中隆鈕	単圈(細)	10.50	0.58	都文化財
35	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 前	梅樹双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	10.70	0.65	都文化財
36	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	平安末 12c 後	柳樹双雀鏡	外傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	10.00	0.53	都文化財
37	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 後	松樹双鳥鏡	内傾式中縁	花文亀鈕	単圈(中)	10.20	0.70	都文化財
38	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 中	菊水双雀鏡	内傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.40	0.75	都文化財
39	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 中	竹垣?菊花双雀鏡	内縁式中縁	菊花亀甲亀鈕	単圈(中)	9.80	0.79	都文化財
40	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 中-後	菊水双雀鏡	内傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	8.10	0.57	都文化財
41	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 中-後	筏流双雀鏡	内傾式細縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	7.40	0.50	都文化財
42	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 中-後	菊花散双雀鏡	内傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	8.10	0.44	都文化財
43	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 中-後	松樹双雀鏡	直角式中縁	菊花中隆鈕	単圈(細)	8.90	0.55	都文化財
44	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 中-後	楓葉散双鳥鏡	直角式中縁	振菊中隆鈕	単圈(細)	7.90	0.35	都文化財
45	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 中-後	亀甲地双鳥鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	8.10	0.50	都文化財

三宅島出土・伝世和鏡一覧（2）

No.	出土伝世地・保管者	所在地	時期	名称	縁式	鈕式	界圍	面径 (cm)	縁高 (cm)	備考
46	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 中～後	菊花双鳥鏡	内傾式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	7.40	0.53	都文化財
47	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前	亀甲地双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	11.10	0.72	都文化財
48	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前	亀甲地双雀鏡	外傾式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	11.20	0.75	都文化財
49	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前	亀甲地双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	11.40	0.68	都文化財
50	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前	亀甲地双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	11.40	0.75	都文化財
51	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前	竹垣秋草双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	11.20	0.67	都文化財
52	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前	柳葉双雀鏡	外傾式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	10.60	0.77	都文化財
53	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前	亀甲地双雀鏡	直角式中縁	菊花亀甲鈕	単圈(中)	11.52	0.80	都文化財
54	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前	亀甲地双雀鏡	直角式中縁	菊花亀甲鈕	単圈(中)	11.50	0.80	都文化財
55	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 15c	蓬萊鏡	直角式中縁	菊花亀甲鈕	単圈(中)	11.00	0.75	都文化財
56	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前	亀甲地双雀鏡	外傾式中縁	花菱亀甲鈕	単圈(中)	11.60	0.86	都文化財
57	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 15c 前	愛染明王(蓬萊?)鏡	内傾式中縁	菊花亀甲鈕	単圈(中)	11.10	0.93	都文化財
58	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前	輪違草花双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	11.40	0.65	都文化財
59	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 15c 前～中	浅流双雀鏡	直角式中縁	菊花亀甲鈕	単圈(中)	9.90	0.86	都文化財
60	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前～中	菊花散双雀鏡	直角式中縁	菊花亀甲鈕	特殊圈	9.10	0.70	都文化財
61	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前～中	松樹双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圈	10.20	0.80	都文化財
62	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前～中	秋草双雀鏡	直角式中縁	花菱亀甲鈕	特殊圈	11.00	0.80	都文化財
63	神沢神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前～中	松樹三ヶ月双雀鏡	直角式中縁	菊花亀甲鈕	特殊圈	9.90	0.88	都文化財
64	姉川神社／島沢氏蔵	伊豆	室町 14c 前～中	菊花散双雀鏡	直角式中縁	菊花亀甲鈕	単圈(細)	11.50	0.80	
65	八十司神社 ／三宅村教育委員会蔵	阿古	鎌倉 13c	菊花双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	11.25	0.91	
66	薬師堂	伊豆	平安末 12c 後	洲浜桜樹双雀鏡	不明	花蕊中隆鈕	単圈(中)	拓影10.06	0.50	所在不明 新規確認
67	中郷遺跡 西群3号積石遺構 ／明治大学博物館蔵	坪田	鎌倉 13c 中～後	菊花双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	11.20	1.20	明大博 NoB-242
68	中郷遺跡 西群(出土遺構不明)	坪田	鎌倉 13c 中～後	籬菊花双雀鏡	不明	不明	単圈(中)	拓影11.10	不明	所在不明
69	土屋家屋敷神／土屋氏蔵	伊豆	鎌倉 13c 中	梅枝鳥蝶鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	写真11.10	不明	新規確認
70	土屋家屋敷神／土屋氏蔵	伊豆	平安末 12c 後	松喰鶴鏡	直角式中縁	菊花中隆鈕	単圈(中)	11.20	0.60	
71	土屋家屋敷神／土屋氏蔵	伊豆	平安末 12c 後	松喰鶴鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.10	0.61	焼損顕著
72	土屋家屋敷神／土屋氏蔵	伊豆	平安末 12c 後	桜花双雀鏡	直角式厚縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.12	0.60	
73	土屋家屋敷神／土屋氏蔵	伊豆	平安末 12c 後	蓬萊鏡	直角式厚縁	振菊中隆鈕	単圈(中)	11.90	0.60	
74	大長井積石遺構群 1号積石遺構／筑波氏蔵	坪田	平安末 12c 前～中	梅花双鳥鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	10.00	0.40	
75	筑波家屋敷神／筑波氏蔵	坪田	室町 15c	菊花散双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	8.10	0.55	
76	旧松村家屋敷神／松村氏蔵	坪田	鎌倉 13c 前	桜花双鳥鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	10.80	0.76	
77	旧松村家屋敷神／松村氏蔵	坪田	室町 16c	蓬萊鏡	直角式中縁	菊花亀甲鈕	単圈(中)	11.00	0.69	都文化財
78	旧松村家屋敷神／桑原氏蔵	坪田	平安末 12c 後	鶴亀鏡	蒲鉾式細縁	素円鈕	なし	8.80× 7.70	0.69	
79	田中家屋敷神／田中氏蔵	坪田	鎌倉 13c 前	山吹双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	11.20	0.77	都文化財
80	上原遺跡／松村氏蔵	坪田	平安末 12c 後	山吹散双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(細)	10.80	0.71	都文化財
81	田村氏蔵	坪田	鎌倉 13c 中	秋草双雀鏡	直角式中縁	欠損	単圈(細)	10.40	0.71	
82	佐藤氏蔵	坪田	室町 14c	亀甲地文双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.40	0.25	
83	佐藤氏蔵	坪田	室町 15c	亀甲地文双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	11.46	1.00	
84	三宅村教育委員会蔵	阿古	鎌倉 13c 前	菊花双雀鏡	直角式中縁	振菊中隆鈕	単圈(中)	11.20	0.61	
85	三宅村教育委員会蔵	阿古	室町 14c 後～15c 初	俵舟双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圈(中)	10.80	0.70	
86	浅沼氏蔵	神着	室町 15c	亀甲地文双雀鏡	直角式中縁	菊花亀甲鈕	単圈(中)	10.80	0.61	
87	浅沼氏蔵	神着	室町 15c	群鳥鏡	直角式中縁	菊花亀甲鈕	単圈(中)	10.70	0.63	